

平成26年度

学生発 地域未来創生 プロジェクト

地域を動かしてゆくには？

—— 成果報告書 ——



平成27年2月

弘前大学特定プロジェクト教育研究センター
地域未来創生センター

目 次

1	はじめに	1
2	成果報告	
報告 1		3
	「つくろう・味わおう・ふれあおう あおもり・通リズム」 (弘前大学 李ゼミ)	
報告 2		19
	「青森健康改革～未来へつなぐ運動プロジェクト～」 (弘前大学 小谷田ゼミ)	
報告 3		31
	「農の魅力、子どもに発信！」 (弘前大学 金目ゼミ)	
報告 4		55
	「人口減少と新しい街づくり～次世代の空き家活用～」 (弘前大学 飯島ゼミ)	
3	関連資料	68

はじめに

この報告書は、「学生発、地域未来創生プロジェクト」として人文学部の学生諸君が青森県をはじめとする地域の課題に対する課題解決型の地域アクティブラーニングを実施した成果をまとめたものです。

弘前大学は、地方中核大学として、「地域志向の人材育成」をミッションの一つに挙げています。本事業は、大学で学んだ専門地域を活かして地域課題の解決を図る人材を積極的に育成するために行ったものであります。

今年度は、人文学部から4チームが参加し、観光と健康、農業、空き家対策など、この地域がかかえている重要課題の解決に挑戦しました。学生自ら課題を発見し、資料収集、関係者への取材、実践的な体験学習、新しい政策提言など学生ならではの目線で積極的にチーム学習を取り組んできました。一連の学習成果は、本事業の成果発表会を行い、本報告書にとりまとめ、地域住民の皆さんと共有したと思います。本事業が、元気で持続可能な地域づくりを考える上で一助になれば幸いと存じます。

本事業を通して学生らに貴重な学びの場を作ってくださった関係機関や地域の皆様に心から感謝申し上げます。また、成果発表会においては、高橋哲史氏、鹿内葵氏に貴重な助言等をいただきました。深く感謝申し上げます。今後も、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

平成27年2月吉日

弘前大学地域未来創生センター長 李永俊

「つくろう・味わおう・ふれあおう
あおもり・通りズム」

弘前大学 李ゼミ

石本康真

佐々木朋子

齋藤舜也

高橋開

千葉緑

長岡和樹

長岐悠也

長尾晃汰

1. はじめに

現在青森県が抱える課題の一つとして人口減少の克服がある。青森県の人口減少の大きな原因は様々なものがあるが、私たちは特に若者の県外流出に原因があると考えた。ここでは若者という大きな括りの中から特に、大学卒業時の年代である若者を研究対象として絞ることにした。それは、この年代の県外流出は自らの意思で就職先を決めていることが大半を占めており、県外就職を考える若者の視線を県内に向けることで県外流出の抑制が可能になると考えたためである。その若者たちが県外へ出る理由としては様々なものが考えられるが、私たちは青森県への愛着不足が強くかかわっていると考え、愛着に注目した。

そこで、青森県への愛着を湧かせるために注目したのがグリーンツーリズムである。私たちが提案するグリーンツーリズムは青森県の魅力を知ってもらい、愛着を湧かせることを軸とする。そのため、日帰りや短期滞在が多い今までのグリーンツーリズムでは愛着を湧かせるには不十分であると考えた。そこで私たちは今までのグリーンツーリズムとは異なる、長期にわたって通い、観光も取り入れる、「通うグリーンツーリズム」を提案したいと考える。

この「通うグリーンツーリズム」に若者が実際に参加することで、今まで知らなかった青森県について知り、青森県の魅力に気づききっかけにつながるだろう。また、何度も地域へ足を運ぶことで地域へ愛着を持つきっかけになるだろう。愛着を持った若者は、県内への就職を選択肢の一つとして意識するようになり、県内に就職する若者が増え、将来的には若者の県外流出人口は徐々に減少していくだろう。そして、最終的に青森県の人口減少抑制を目指していくことができると考えている。

2. 構成

本研究は、青森県が現在置かれている現状の把握と抱えている課題の克服に向けて、次に東目屋、南部町での実地調査とアンケート調査について、そして最後に課題解決のための新しいプランの提案、という順番で進めていく。

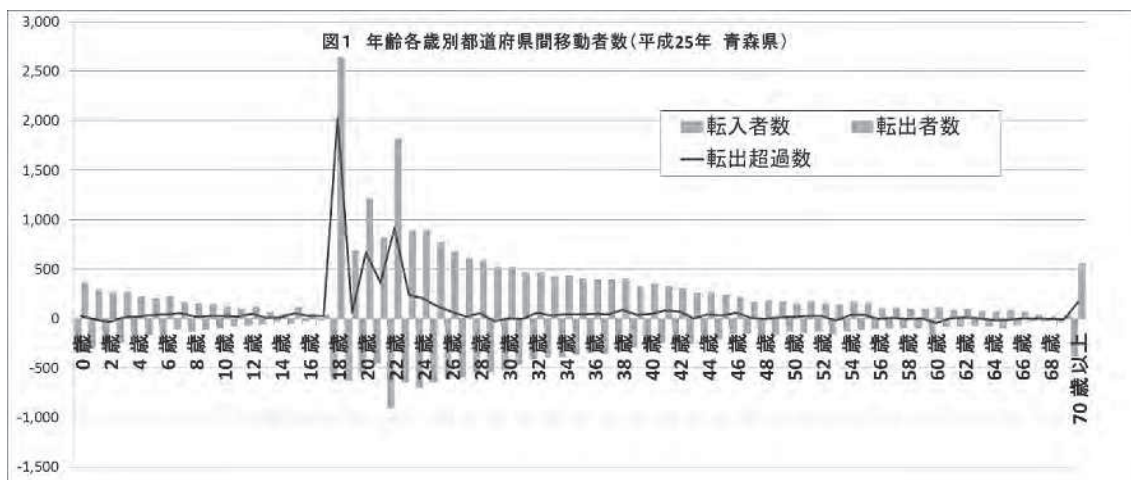
- 現在の課題とその克服に向けて
 - ・青森県の課題と原因
 - ・グリーンツーリズムの提案
- 実地調査
 - ・東目屋、南部町でのグリーンツーリズム
 - ・東目屋での米作り
 - ・実地調査からわかったこと
 - ・実地調査で私たちが感じたこと

- ・考察
- アンケート調査
- 提案
 - ・通うグリーンツーリズム
 - ・パンフレット
- まとめ
- 調査研究に参加しての感想

3. 現在の課題とその克服に向けて

1. 青森県の課題と原因

青森県の大きな課題として、人口減少の克服がある。本県の人口は毎年1万人のペースで減少している。平成22年国勢調査では本県の人口は137万3000人であるが、国立社会保障・人口問題研究によればこの現象が今後も続くと平成52年には100万人を切ると予想されている。人口減少は、消費活動の低迷や労働力人口の減少など本県に様々な影響を与えることから、一刻も早く何か手を打たなければならない状況である。



資料：総務省統計局 国勢調査

人口減少の原因には様々な要因が考えられるが、私たちが注目したのが若者の県外流出である。図1は青森県の転入者数、転出者数を年齢別に示したグラフである。ここから、県外への流出のピークは18歳と22歳の2つが存在することがわかる。18歳の移動は大学への進学によるものが多く、学生がやりたい研究内容や整った環境が県内の大学だけでは対応しきれないという理由から、止めることが出来ない人口流出なのではないかと考えた。また大学進学を機に県外へ出たとしても、就職時に青森県へUターンする可能性も残っている。それに対し、22歳の移動は県外の就職による人口流出である。1

度県を離れてしまい、就職、結婚、育児となれば青森県に戻ってくる可能性は極めて低い
ため、この部分は改善しなければならないのではないだろうか。若者の目線を県外で
はなく県内にむけることで改善の余地がまだまだあると私たちは考えた。

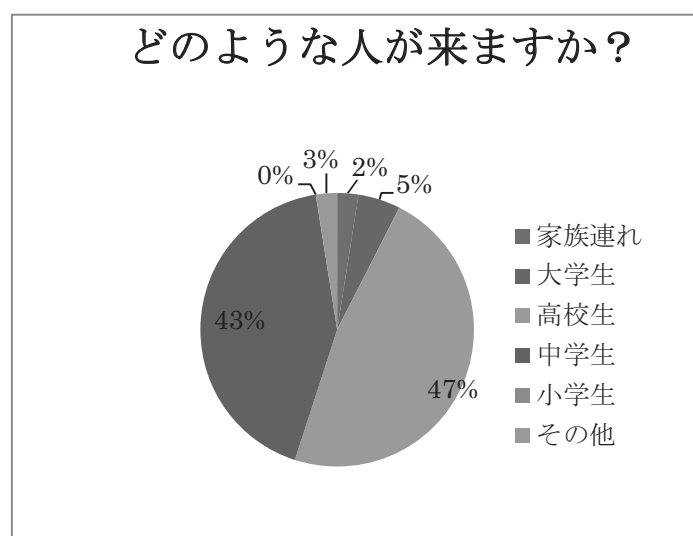
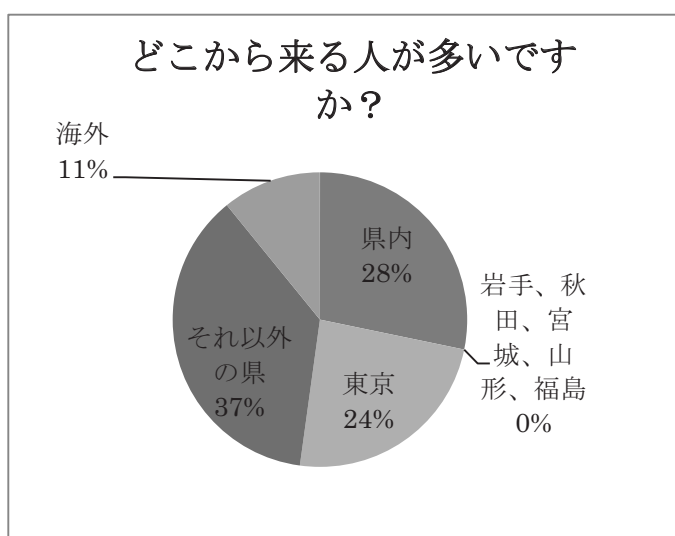
では、若者はなぜ県外に就職するのだろうか。青森県の最低賃金や平均年収が低いこ
と、青森県に対する愛着が足りないこと、首都圏の方がなんでもあり便利な生活ができ
ることなど様々な理由が考えられるが、私たちは特に、若者の青森県に対する愛着不足
に着目し、研究を進めていくことに決めた。

2. グリーンツーリズムの提案

では、青森県は若者が愛着を持ってない、全く魅力のない県なのだろうか。そんなことは
ない。私たちはゼミの活動の一環として、十和田湖といった名所観光や農家民泊をして多
くの人と関った。そこで私たちは青森は食べ物がおいしく、人が温かく、そして自然が豊
かあり、実は魅力が多い県であると実感した。しかし、こういった魅力を知ってはいても、
実感している若者は少ないのではないだろうか。「青森には何もない」「魅力を感じない」「愛
着が持てない」と思っている若者は、ぜひこの青森の良さを実感し、それから県外に出る
かどうか考えてもらいたいと思った。

では、青森の若者に青森の魅力伝え、青森に愛着を持つようにするにはどうしたら
よいだろうか。私たちはあることに注目した。それは「グリーンツーリズム」である。
グリーンツーリズムとは一体何だろうか。農林水産省はグリーンツーリズムを「農山漁
村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」と定義している。
私たちは、青森の若者が青森の農村地域に滞在し、農作業体験や郷土料理作り、農家民
泊などを行うことで青森の魅力を伝えることができるのではないかと考えた。

そこで、私たちは青森県南部町で農家民泊をしている農家の方々に、グリーンツーリ
ズムの体験者の出身地と年代についてのアンケート調査を行った。



上の円グラフから読み取れるのは、青森県のグリーンツーリズムの体験者は県内より県外から来る人が多く、また年代は中学生や高校生が多いことが分かる。これは南部町が県外の修学旅行生の受け入れを積極的に行っているためである。その一方、県内から来る人が少なく、また大学生の体験者は非常に少ないことが分かる。先ほど示した県外流出のグラフで私たちは 22 歳の若者の県外流出に着目したが、大学生はまさにその 22 歳の就職期に差し掛かる時期である。私たちはグリーンツーリズムが県内の大学生に青森県に対する愛着を持ってもらえる手段だと思い、グリーンツーリズムの提案には、グリーンツーリズムに対する大学生目線の意見が必要と考え、夏休みを利用して自らグリーンツーリズムを体験することにした。

4. 実地調査

1. 実地調査へ

下調べにより、グリーン・ツーリズムは大半が短期滞在・一度きりのものだということが分かった。長期的なグリーン・ツーリズムを提案するにあたり、まずは私たちが既存のグリーン・ツーリズムを体験し、実態を知ることが必要である。そこで私たちは実際に現地に赴き、実地調査を行うことにした。

2. 実地調査

① 東目屋でのグリーン・ツーリズム体験

私たちは弘前市東目屋にて、グリーン・ツーリズムを体験。農家さんの家では野菜を収穫して皆で料理をしたり、押し花、薪割り、精米などの普段は出来ないような体験ばかりだった。特に青森県の郷土料理の「けの汁」は具たくさんで美味しく、青森県の大きな魅力だと感じた。他には、プラン提案に役立てるために世界遺産である白神山地へ行き、雄大な大自然に私たちは魅了された。





② 南部町でのグリーン・ツーリズム体験

南部町ではゼミ生が半分に別れ、2軒の農家さんのもとでそれぞれ農家民泊。果樹作業を手伝い、そば作りなども体験。東目屋も南部町も農家さんが暖かくて、とても居心地が良かった。農家さんの家にはグリーン・ツーリズムの参加者との思い出の写真がたくさん飾られており、改めてグリーン・ツーリズムが良いものだと感じた。





③ 田植え～収穫までの作業体験

東目屋に一年を通して通い田植え、稲刈り、草刈り、収穫を体験。下の写真は稲刈り・収穫祭での写真である。一年間かけて自分たちが農家さんと一緒に作った米を使って東目屋の小学生と餅つき。普通に食べる餅と違い、自分たちの手で作った餅はとても美味しく、私たちの東目屋に対しての愛着がより一層増した瞬間だった。



3. 調査をしてわかったこと

- ・参加者のほとんどは修学旅行生（中高生）で、大学生の参加はあまりない
- ・学校単位でのリピートはあるが、個人のリピートはあまりない

- ・県外をターゲットにしているため、県内の人はあまり来ない、特に関西・関東が多い
- ・グリーン・ツーリズムを体験して定住した人は一人もいない
- ・外国(アジア圏)からの参加者もいる
- ・震災で参加者が減少している

4. 実地調査で私たちが感じたこと

- ・農家の人や東目屋の人々は親切でとても暖かかった
- ・青森は農産資源が強く、味も格別に美味しい
- ・大自然の魅力があり、グリーン・ツーリズムに組み込む価値が大いにある
- ・長い期間をかけ、実際に足を運び、私たち自身その地域に愛着を持つことができた
- ・人や自然などに触れ、心も体もリフレッシュすることができた
- ・リピーターがほとんどいないことから、また来たいと思わせることが大事
- ・何回も参加できるような仕組みが必要

5. 考察

以上の調査から、より一層愛着を持ってもらうためには参加者が何回も訪れることができるようなグリーン・ツーリズムが必要であると私たちは考えた。そして、青森県にはグリーン・ツーリズムに組み込むことができる魅力に溢れていることを認識し、この魅力を最大限利用することが重要であると私たちは感じた。

よって、私たちは青森の魅力を使い、新たなグリーン・ツーリズムを提案する。それが長期的なグリーン・ツーリズムである。

5. アンケート調査

・概要

私たちは青森県の若者の流入・流出人口からターゲットを大学生に設定した。大学生がどの程度グリーンツーリズムを認知しているのか、どういったグリーンツーリズムなら関心を持つのかを知るために実際に大学生にアンケート調査を行った。以下に調査結果からわかったことを示す。

実施期間：2014年9月～10月

方 法：アンケート票配布、回収

対 象：青森公立大学・弘前大学学生
達者村ホームステイ連絡協議会会員農家

総 数：115件(大学生)、19件(農家)

・アンケート調査からわかったこと

大学生の約8割はグリーンツーリズムという言葉自体を知らなかった。そこで、「農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」というグリーンツーリズムの意味を踏まえてどのような体験がしたいのかを聞くと農業体験・酪農体験・キャンプ・地元の人との交流という結果が得られた。また、具体的にどういったことをしたいか聞くと、もちろん農業体験は出てきたが「自然を見たい、触れたい」という回答が一番多かった。そこで、グリーンツーリズムと一緒に観光もしてみたいかという質問をしたところ、やりたいと思ったひとは9割を超えていた。ここから大学生に興味をもってもらうにはグリーンツーリズム+観光という形が一番適しているとわかった。

次に大学生が参加日数は何日が適当だと思っているか調べた。以下に図を示す。

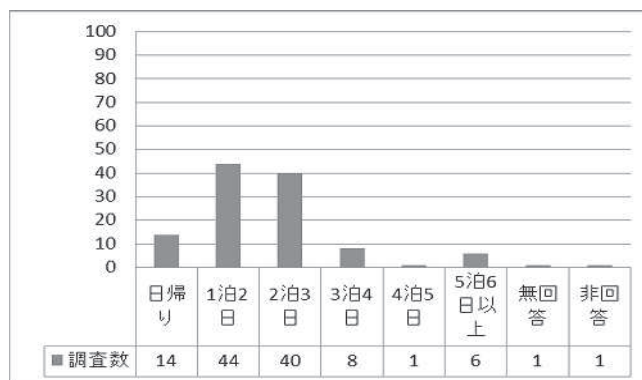


図 Q グリーンツーリズムの参加日数は何日が適当か

図を見ると1泊2日と2泊3日が全体の7割弱を占めていることから、長期滞在型のグリーンツーリズムよりは短い期間での滞在が適していることがわかった。

次に私たちが提案するグリーンツーリズムと観光を一緒にした通うグリーンツーリズムがあるとしたら参加したいかどうか、また、1回あたりの金額はいくらが適しているかを調べた。

まず、通うグリーンツーリズムに参加したいかどうか調べた。以下に図を示す。

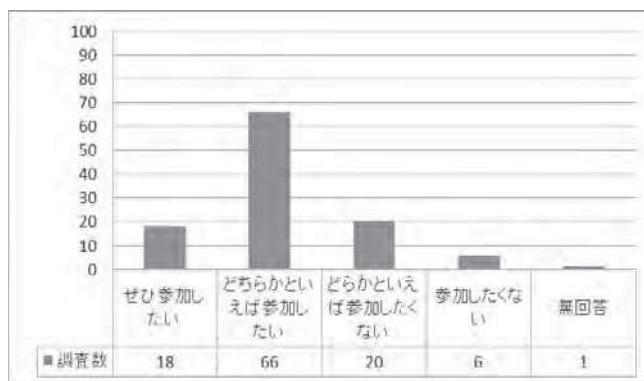


図 Q 通うグリーンツーリズムがあれば参加してみたいか

図を見ると全体の約7割半が参加したいと考えており、大学生は通うグリーンツーリズ

ムに対して肯定的ということが分かる。

次に1回あたりの参加にかかるお金はいくらくらいが良いと考えているのか、農家側が希望する金額と大学生の希望する金額で比較してみた。以下に図を示す。

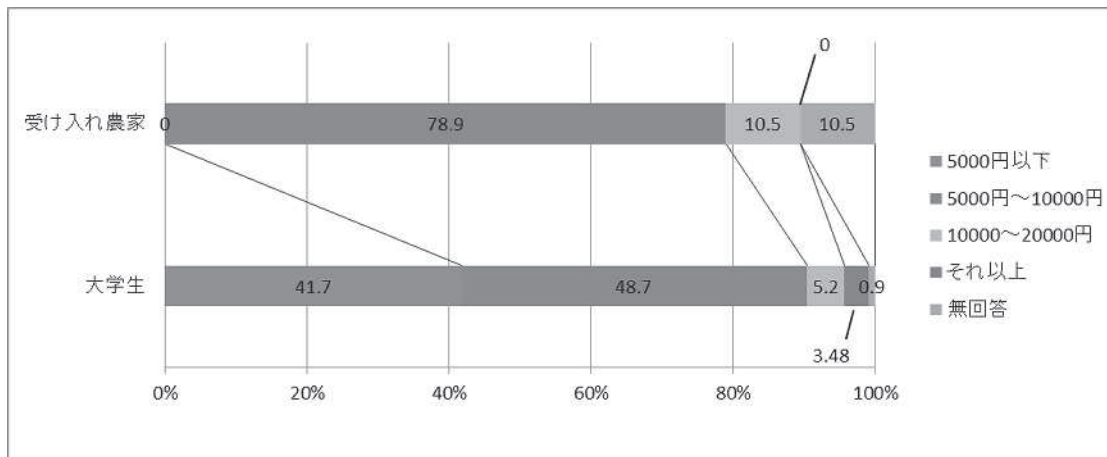


図 大学生・農家の1回あたりのグリーンツーリズム参加で希望する金額 (%)

受け入れ農家の約8割が5000円～10000円を希望しているのに対して、大学生の約半分が5000円～10000円を希望しているため両者の希望は一致している。希望を平均してみると価格は7000円くらいが適当である。しかし、大学生の約4割は5000円以下を希望している。ここから私たちの課題としては彼らが1人でも多く5000円～10000円の割合に移動してくるような魅力的なプランを立案できるように工夫していかなければならない。

大学生にグリーンツーリズムはあまり知られていなかったが、あれば参加したいと考えている人が思っているよりも多かった。彼らが持っている興味を実際の参加に繋げられるように魅力のあるプランを提供しなければならない。そのために大学生の関心と実際にグリーンツーリズムをしている農家の考えをよく知ることができた。

6. 提案

これまで行われてきたグリーンツーリズムにはある問題点があった。それは、青森でグリーンツーリズムを体験した人の多くは日帰りや短期滞在で、1回来ただけで終わってしまうことである。これでは青森への愛着が持てない。

そこで私たちはこの問題を解消するために「通うグリーンツーリズム」を提案することにした。「通うグリーンツーリズム」では今までのグリーンツーリズムとは異なり、体験者に年間を通して青森の農村に何回も足を運んでもらい、農作物を育て、収穫し、そしてそれを口にするまでの一連の流れを体験する。こうすることで体験者に青森の魅力をより多く伝えることができ、青森への愛着が湧くきっかけになるのではないかと私たちは考えた。

(1) 通うグリーンツーリズム

私たちの提案する通うグリーンツーリズムは、1回きりで終わってしまっていたこれまでのグリーンツーリズムとは異なり、「体験者に年間を通して通ってもらう」ものである。農作物を作り、収穫し、口にするまでの一連の流れを体験してもらうことで、青森県の魅力をより深く知り、通うたびに青森県に対する愛着を持ってもらうことができる。

(2) パンフレット

通うグリーンツーリズムのプランとして、自分たちの体験を元に東目屋での米作り体験の一例を提示する。1年間に春、夏、秋、冬の計4回通ってもらうことで、田植えから稲刈り、収穫祭までの一連の流れを体験することができるようになっている。このプランからパンフレットを作成した。以下がその内容である。





①第1回目（春：5月）

春の1日目は手作業での田植えから始まる。その後、農家さんと一緒に東目屋で採れた山菜・野菜を使って「けの汁」などの郷土料理を作ってもらう。

2日目には世界遺産の白神山地への観光を取り入れた。

②第2回目（夏：8月）

夏の1日目にはまず、田んぼの水路を確保するための草刈りを行う。昼食には流しそうめんがあり、農家の皆さんとの交流が楽しめる。また弘前ねふた祭りや、東目屋でのホテル観察・星空観察など、この地域ならではの体験も含まれている。

2日目は弘前公園周辺で金魚ねふた作りを行うなど、夏の弘前の魅力を体験できる内容となっている。

③第3回目（秋：9～10月）

秋の1日目には稲刈りを行う。稲刈りから天日干しまでの作業を全て手作業で行うため、重労働となることが考えられるが、その後、国吉温泉や三本柳温泉といった周辺の温泉で疲れを癒すことができる。

2日目は青森の秋を堪能してもらおうという事で、岩木山の紅葉で自然の秋を、青森の食材を使ったバーベキューで食欲の秋を楽しんでもらう。さらに釣り堀での釣りなどの楽しみも盛り込んだ。

④第4回目（冬：11～12月）

冬の1日目にはいよいよ自らが作ったお米の収穫祭を行う。自分たちが育てたお米

を農家の皆さんと一緒に食べることで一層交流を深めることができる。

2日目には作ったお米から日本酒を造る体験をしてもらう。出来た日本酒には、名前や写真を入れたラベルを付けて、後日本人にプレゼントする。以上で、一年間の体験は終了となる。

このプラン作成において重視した点は、ただ青森の農業体験に触れてもらうだけでなく、農家さんとの交流を深めることができ、また青森県内の観光も盛り込んだ点である。青森県内の農家さんの温かさに触れ、県内の観光も楽しむことで、参加者は通う度に青森県に愛着を持つようになるだろう。

以上が私たちの提案する通うグリーンツーリズムプランの一例だ。

7. まとめ

私たちは青森県の人口減少を克服するためには若者の県外流出を抑える必要があると考えた。そのためには若者に青森県の魅力を伝える必要がある。その手段として、一年を通して青森に通ってもらう「通うグリーンツーリズム」を提案する。これを通して青森を知ってもらうことで青森に愛着をもってもらい、県内就職を視野に入れてもらうきっかけをつくることができ、ゆくゆくは若者の県外流出を抑えることができると考えられる。よって私たちは青森県の人口減少克服のための手段として、「通うグリーンツーリズム」を提案する。

○ 調査研究に参加しての感想

長尾晃汰

県庁プロジェクトに取り組んでみて、青森県は魅力がたくさんいいところがある所だと改めて実感することができました。私は青森県出身でありながら白神山地や八甲田の地獄沼などの観光スポットには一度も行ったことがなく、今回の活動で行って青森の自然の美しさに感動しました。また、グリーンツーリズムを通して農家さんたちと交流し、農家さんは心が優しいだけでなく農業に対する情熱やプライドも内に秘めながら毎日頑張っているんだということが分かりました。大学を卒業したらそんな青森の魅力をいろんな人に伝えられるように頑張りたいと思います。

齋藤舜也

提案をより具体的にするために実際にグリーンツーリズムに参加し、農業の大

変さを知りました。しかし同時に農業の楽しさや人との出会いにより、見識が広がり、青森県に対する愛情が深まったと感じました。このような機会を与えて、きっかけを作ってくれた本プロジェクトに感謝したい。ゼミのメンバーと貴重な体験ができてよかったです。

長岐 悠也

私が李ゼミナールに入ったのは、フィールドワークがしたかったからです。だから県庁プロジェクトに参加し、実際に現地に足を運び、自分自身が体験し、生の声を人々から聞いたことでとても有意義な体験が出来たと思いました。今回、グリーン・ツーリズムというテーマを取り上げて実際に参加し、郷土料理や青森の大自然、農作業など普段出来ないような体験をしたことは今後活かせる良い経験になりました。そして、何よりこのプロジェクトを通して、青森県に愛着を持つことができました。私たちが愛着を持つことが出来たのだから他の人も絶対に愛着を持つことができると私は感じました。だから、是非ともグリーン・ツーリズムに多くの人が参加して欲しいと思いました。

長岡 和樹

今回のプロジェクトに参加して、自分は今回のような機会がなければ青森県をほとんど知らないまま大学を卒業していたと思う。実際にゼミで県内を調査し、改善策を考えている過程で発見が多かった。知ることをきっかけに興味を持つこともできて、また地域の人たちと触れ合ってまた来たいと思った。ネットを通して知ることもちろんできるが、実際に肌身で感じて体験することは同じ情報でも全然違う発見ができる。青森県に愛着を抱くことができるようになったので、今回のプロジェクトに参加できて良かったと思う。これからも自分の知らない青森を1つでも多く見つけられればいいと思いました。

佐々木朋子

調査の一環として、田植えから稲刈りまでを体験するために東目屋に通い、グリーンツーリズムを体験するために東目屋と南部町に足を運んだ。そこでは多くの人と出会い、多くの自然と触れ合うことができ、この調査を進める過程で、自分自身、少しずつ積極的になれていると感じた。今回のプロジェクトに参加して、青森県の現状について考え、自分たちなりの考えを持って学生目線での提案ができたこと、これらを大学生である間に経験することができたのは自分にとって大きな財産になると思った。最後に、この研究を進めていく上で多くの方々の支えがあったということへの感謝の気持ちを忘れずにいたいと思う。

高橋 開

今回、県庁プロジェクトによってこのような機会を得られたことで、フィールドワークの大切さを知ることが出来た。県庁プロジェクトによってフィールドワークをしたことで、それまでになかった視点から地域を見直すことができ、新しい発見も多くあった。実際に地域を訪れ調査をするということは、社会に出る一歩手前の私たち大学生にとって、その地域の特色や問題、知識などをリアルに感じることができるという点で大切なことだと思った。大学生である今、この県庁プロジェクトに参加できたことは、とても貴重な体験となったと実感している。

石本康真

今回、県庁プロジェクトを通じて青森県の魅力を知ることが出来たことに感謝したいと思う。私たちはお米づくりを一から体験するために一年間を通じて東目屋村に通い、そこで地域の人たちとの交流を通して、この地に「愛着」が生まれました。こんな素晴らしい経験を大学生活で送れたことは自分の今後の人生にとっても必ず生きてくると思ったのと同時にこの活動を青森の大学生にもぜひとも経験し、私たち同様「青森県に愛着」を感じてもらいたい。最後になりますが、県庁プロジェクトに関わってくれたすべての方に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

千葉緑

通うグリーンツーリズムをテーマに、1年間田植えから稲刈りまでの体験や農家さんとの交流を行い、自然とふれあうことで、すっかり青森県に魅了されてしまった。農家さんの温かい人柄が印象的で、農業に対する思いや自信に触れることができ、私たちが普段食べているものへのありがたみを改めて実感することができた。座学ではなく、実際に訪れ体験することによって発見できることは多く、提案にも説得力が増し良いものに仕上がったと感じる。課題と向き合い、仲間と試行錯誤しながら納得のいく提案を作り上げることは決して簡単なことではなかったが、とてもやりがいのあるものだった。この貴重な経験を今後に生かしていきたい。

**「青森健康改革
～未来へつなぐ運動プロジェクト～」**

弘前大学 小谷田ゼミ

鹿嶋良介

川端延都

鈴木貴也

畑中一輝

堀春海

蒔苗裕太

三橋弘靖

米谷光史

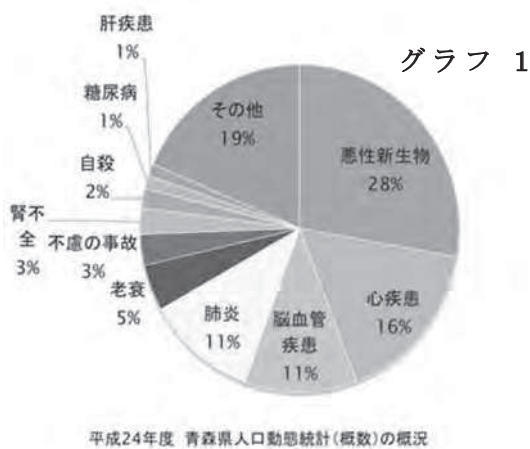
1. はじめに

本取組は、青森県の「未来を変える挑戦」に参加するため、与えられた3つのテーマ(人口減少克服プロジェクト、健康長寿県プロジェクト、食でとことんプロジェクト)の中から健康長寿県プロジェクトを選択した。平均寿命が全国最下位である本県を健康長寿県へと導くため、私たちは健康問題を引き起こす原因の1つである運動不足に目を向けた。後に詳細を述べることにするが、本県民の死亡原因の6割が生活習慣病であることと、小学生の肥満率は全国平均よりも高水準であることから、子どもの時からの運動習慣が大人になっても影響を与えると結論づけた。このプロジェクトは子どもの運動習慣を定着してもらおうことが、健康長寿県へ導くものとして活動を行ってきた。

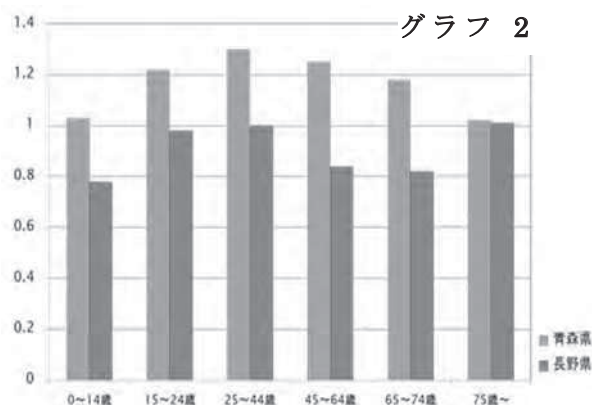
2. 問題意識

私たちは青森県の抱える健康問題として二つの問題に着目した。

一つ目の問題は青森県が短命県であるという問題である。テレビのコマーシャルや新聞など、各メディアで青森県は短命県であると報道されているが、実際に青森県がどのくらいの問題を抱えた短命県であるのかを知る必要がある。私たちは青森県内の死亡原因と年齢別の死亡率から青森県が短命県であるかを導きだした。



青森県における主な死亡原因について表したものが左のグラフ1である。このグラフから、悪性新生物、心疾患、脳血管疾患といった生活習慣病が原因で死亡している人が全体の約6割を占めていることが分かる。このグラフは青森県と長野県の死亡率を比較したものである。平成二十二年の厚生労働省公表のデータによると、青森県の平均寿命は男女とも最下位であり、長野県は男女ともに一位を飾っている。このグラフ2から45歳～64歳の世代で両県の死亡率の差が最大であることが分かる。青森県が短命県から脱却を図るためには45歳～64歳の中年層と呼ばれる人々の死亡率を減らすことが重要だと考えられる。



二つ目の問題は青森県内の子どもたちが肥満傾向にあるという問題である。なぜ子どもという低年齢層を問題に挙げたかという、子どもは将来の生活習慣病予備軍であると考えられるからだ。したがって、子どものうちから生活習慣を整えることが出来れば将来、生活習慣病の発症を防ぐことが出来るのではないかと考えたため、青森県の子どもたちの肥満率を問題として挙げるのだ。

表 1

順位	男	割合	女	割合
1位	北海道	15.3%	岩手県	12.5%
2位	福島県	14.9%	青森県	11.4%
3位	山形県	14.7%	北海道	11.3%
4位	岩手県	14.5%	福島県	10.8%
5位	青森県	14.1%	宮城県	10.7%

➤この表1は全国における小学生の肥満率を県別に表し順位付けしたものである。青森県は男女ともに上位に位置していることが分かる。

表 2

順位	男	割合	女	割合
1位	滋賀県	75.6%	滋賀県	55.8%
2位	三重県	72.5%	山梨県	53.4%
3位	埼玉県	72.2%	広島県	52.0%

32位	青森県	67.1%
36位	青森県	43.9%

45位	愛媛県	63.5%	山形県	39.6%
46位	熊本県	63.0%	石川県	39.3%
47位	宮崎県	62.6%	佐賀県	38.7%

➤この表2は全国の小学生における日曜日の運動週間を県別に順位付けしたものである。青森県を見てみると相対的に低い順位であることが分かる。

これらのデータから青森県の小学生は肥満傾向にあり、将来における生活習慣病の予備軍であるということが言える。

3. テーマ・意義

(1) テーマ

私たちは青森県の健康問題を解決するために運動を通して短命の原因である生活習慣病・運動不足の解消しようと考えた。そこで私たちは「子どもの運動促進による将来の健康」をテーマに掲げ、この健康問題に取り組んできた。青森県においては中年層の生活習慣病による死亡率が最も高い。しかし、私たちは子どもを対象に運動の楽しさを教える活動をしてきた。その理由としては、働き盛りで時間のない中年層に運動をしてもらうのは困難であるからである。また、現在多くの子どもが

肥満傾向にあり、将来の生活習慣病予備軍であるということが言える。そして、子どもを対象にするメリットとしては①若いときから運動に興味を持ってもらうことで大人になっても運動を継続してもらえ②子どもに運動を好きになってもらうことで親世代も運動に巻き込むことができるということが言える。

しかし、運動＝勝負事という考え方が定着している子どもが多いように思える。この考え方自体は決して悪いことではないが、勝敗を意識するあまり純粋に運動本来の楽しみを見失っているといえる。また、過疎地域においては子どもの数が減少傾向にあり集団運動の実施が困難になっている。そのため、名前は知っているがどのような運動であるのか、自身に合った運動は何なのか分からない子どもがいる。これらのことが原因となって子どもが運動との関わり合いが薄くなる子どもの運動離れが起こると言える。この運動離れをなくさなければ青森の健康問題を解決は見えてこない。そこで、私たち学生が主体となって子どもに運動の楽しさを伝え、機会を提供しようと考え活動に取り組んだ。

(2)意義

この活動を行うことには多くの意義があり次のことが挙げられる。①生活習慣病の原因となっている運動不足の解消②部活動等とは違い純粋に運動本来の楽しさを知ってもらえ③過疎地域に活動拠点を設置しそこに様々な学校から多くの子ども達を集めることで多様な運動の実施が可能となる④体育教師の高齢化に伴い人材を派遣できたりなど各方面のニーズに応じた柔軟な対応ができる。また、学生が行う意義としては次のことが挙げられる。①地域貢献型の大学の学生として地域での活動機会が得られる②子ども年齢が近いお互いの壁が低く親しみやすい③人材が豊富でありスポーツに親しみのある学生が多い④社会と関わることができ学生の成長の糧となる。これらのことからこの活動を学生が行うことには多くのメリットがある。

4. 目的・先行事例

(1)目的

私たちの活動の最大の目的は子どものときから運動習慣をつけてもらうことである。そうすることで大人になっても継続して運動を行うことが期待でき、将来的に健康な体を維持してもらえることが期待できる。そのためには自分にあった好きな運動を見つけてもらい、勝ち負けに重点を置かずに運動の楽しさを知ってもらうことが必要であると考えた。

この目的を達成するための活動にあたり、円滑に行うための企画運営力や単発的でなく継続した活動を行える環境作りが必要であると考えた。

(2)先行事例

ここで先行事例を紹介していきたい。東洋大学ライフデザイン学部健康スポーツ学科では2013年から志木市放課後子ども教室”りんくす”と連携し、子どもを対象にサッカー教室やダンス教室を行うなどの取り組みを始めた。子どもたちに運動を好きになってもらうことや学生自身の指導技術の向上を目標としたこの活動は我々の活動の目的のひとつ

つである子どもに運動の楽しさを知ってもらうという部分が共通している。我々はこの活動を参考にして、さらに子どもに運動を習慣化してもらうために継続的な運動提供を行うことや弘前大学全体に活動を広げることが必要であると考えている。

5. 実践

私たちは NPO 団体スポネット弘前の活動に参加することで、小学生を対象とした運動イベントの企画・運営方法を学び、その後学生が中心となって小学校で運動イベントを実施することとした。まず、スポネット弘前との活動について紹介していきたい。

1) スポネット弘前との活動



▶左の写真は運動前のウォーミングアップで行われたダッシュである。ただ体育館の端から端までダッシュするのではなく、体育館の中程にスポネットスタッフや私たち学生が並びダッシュ中にタッチされた小学生はまたスタートラインに戻るといふ、いわゆる鬼ごっこの要素を取り入れたウォーミングアップとなっている。



▶これは、コーディネーション運動を取り入れたケンケンパで、輪の色によって踏み出す足を変える、といったルールで行われた。コーディネーション運動とは運動神経を鍛えるものである。こういった運動をケンケンパなどの親しみのある運動に取り入れることで小学生たちは楽しみながら運動能力を向上させることができる。



▶写真の大きなボールは「キンボール」という大きく柔らかいバレーボールのようなものである。これは「キンボール」を使ってリフティングを行っている。いつも行っているような運動でも一風変わった道具を用いることで小学生たちを退屈させずに運動させることができる。

これら紹介した運動以外にも様々な運動をスポネット弘前は行っていたがそれらに共通しているのが「勝ち負けに重点を置かないで運動を楽しむ」ことである。勝った、負けたに重点を置きすぎるとほかの子どもに比べて運動が苦手な子どもが運動に対して悪いイメージを持ってしまい積極的に運動しようと思わなくなるからである。【いつも行う運動×ほかの遊び】や【いつも行う運動×普段触れることのない道具】の考え方や【コーディネーション運動を取り入れた遊び】はすべてこの「勝ち負けに重点を置かないで運動を楽しむ」ということにあるのだと私たちはスポネット弘前との活動で学んだ。加えて小学生を相手にする場合の安全性への配慮、ルールや規則を守って遊ばせるようにするなどの教育的配慮も取り入れることもこの活動で得られたよい経験の一つである。スポネット弘前との活動を経て得た経験と企画・運営方法を元に今度は学生が中心となって東目屋小学校、嘉瀬小学校の2校で活動を行った。

2)東目屋小学校、嘉瀬小学校での活動



▶運動前の柔軟をしている写真である。けがの防止も楽しく運動する上で大事なことなので入念に行った。子どもたちも大きな声でこちらのかけ声に応えてくれた。



▶ウォーミングアップにはダッシュを採用した。事前活動と同じくただダッシュするのではなく、頭を使った運動を取り入れることで普段の運動とはひと味違ったものになっており、子どもたちの興味を引くことができた。



▶事前活動でも人気のあったキンボールを活動に取り入れることにした。見慣れない器具を使った運動はやはり子どもたちに受けがよく、参加した全員が積極的に活動に運動してくれた。

この2校での活動は子どもたちが積極的

なこともあり非常に盛り上がり、怪我をする子どももおらず楽しみながら運動をするという目的は達成できたと考えている。この活動を通し私たちは子どもの運動不足を解消するにはこのような活動を行うこと、そして活動を継続的に行うことができれば子どもたちの運動不足解消が促進できると実感した。

6. 組織提案

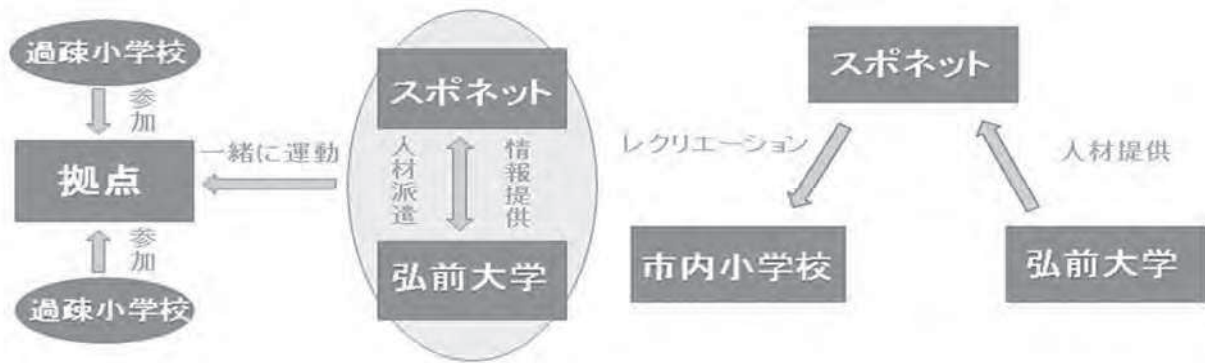
実際に活動をしてアンケートを取る中で、特に過疎地域にある小学校で、集団運動の機会を提供したり、楽しさを伝えたりするための活動が必要とされていることが分かった。しかし、このような活動を提供するためには人材が豊富で、長期的かつ継続的に活動できる組織が必要である。そこで私たちは大学のボランティアセンター内に運動部門をつくることで、運動する機会を継続的に提供できる環境を生み出せるのではないかと考えた。この理由としてはボランティアセンターが既存の組織である上に実績があり、学生だけでなく多くの職員が関わっているため、外部との交渉に必要な信用を得ることができるからである。

しかし、組織設立の課題として時間がかかるということが考えられる。その原因は、ボランティアセンターの現状にある。まず、活動内容の認知度が低いということ。そして、登録者数は多いが活動への参加人数が少ないという現状もある。実際に運動部を設立し、企画・運営していくためには多くの人数が欠かせない。このような課題を解決するためには、組織や活動内容の認知度を高めるための広報活動や、実際に人を集めるために公募をかけることが必要である。

7. 組織

ここまでの話を踏まえて、私たちは二つの段階を踏んで青森県全体的に活動を広めていく。第一段階は、弘前大学の学生が市内のあらゆる場所で活動を行うためのノウハウを身に着けるためのものである。第二段階では弘前大学の学生が中心となって活動を行う提案である。

第一段階は、弘前市内の過疎地域にある小学校と郊外にある小学校の二種類の案を提案する。まずは、過疎地域にある小学校での活動案である。過疎地域にある運動施設を拠点とし、スポネットが周りの小学校の生徒を運動施設に集め、弘前大学が情報提供を受け、学生を派遣して一緒に運動するというものである。複数の小学校の生徒を一か所に集めることで、多くの人数を集められる効果が期待できる。そのため、過疎地域では機会の少ない集団運動の提供を行うことができる。続いて、弘前市郊外にある小学校での活動案である。小学校がスポネットにレクリエーションの依頼をし、スポネットが弘前大学に依頼して学生ボランティアを募るといった形のものである。最終的には弘前大学と郊外の小学校とで直接やりとりをし、弘前大学が人材提供やイベントの企画・提案をし、一緒に運動することを目標としている。



次に、第二段階は学生が中心となって青森県全体へ活動を広げていく提案である。弘前大学の学生が、弘前市内のあらゆる小学校を対象に行った活動を他大学や他NPOに情報発信し、提携を結ぶことで弘前だけではなく青森県全体に活動範囲を広げていくことを目標としている。

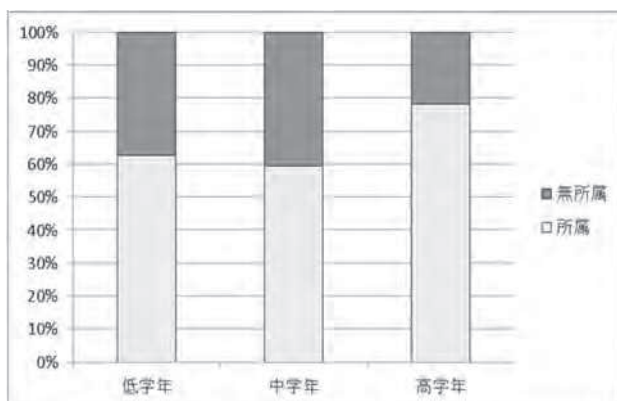


8. アンケート

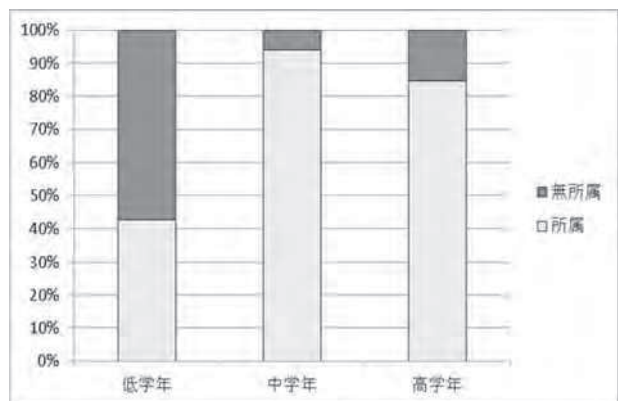
より具体的な児童の運動に対する意識・関心の現状を把握するため私たちは弘前市郊外の小学校と過疎地域の小学校の児童に対してアンケートを実施した。ここで弘前市郊外と過疎地域の小学校にそれぞれアンケートを取ったのは市郊外と過疎地域の児童とでの運動に関する意識・関心の現状の違いを集計した結果から分析し明確にするためである。

実際に行ったアンケートの集計結果からは以下のようなことが分かった。

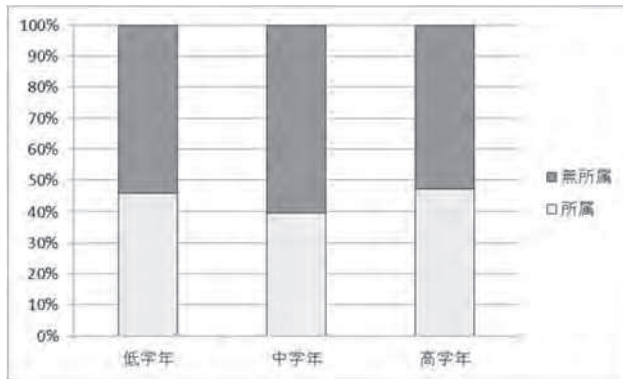
弘前市郊外男子部活所属率



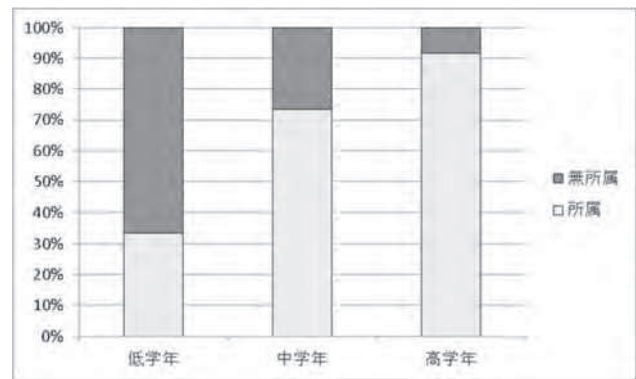
過疎地域男子部活所属率



弘前市郊外女子部活所属率



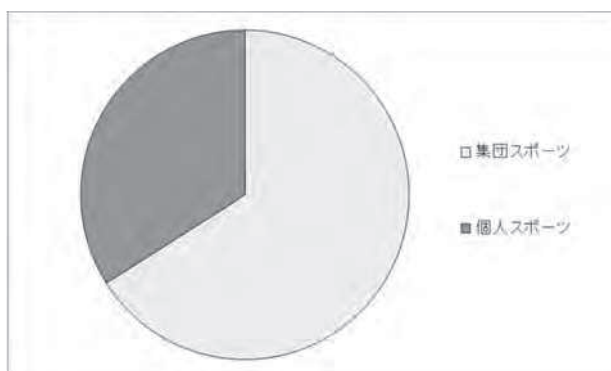
過疎地域女子部活所属率



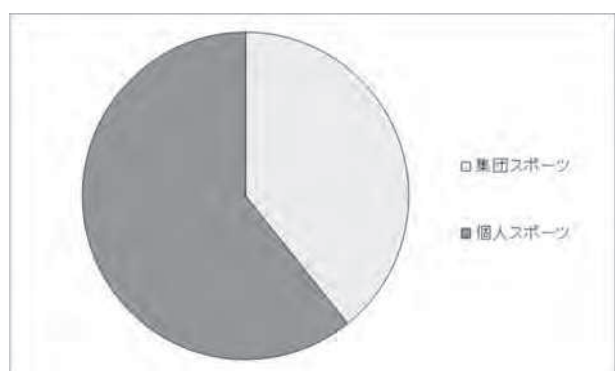
まず、運動部・スポーツクラブに所属しているかというアンケートを取った結果であるが、男女ともに中学年・高学年は過疎地域の小学生の方が部活動への所属率が高いという現状がグラフからは見て取れる。これは、過疎地域の小学生ほど運動環境に恵まれておらず部活に所属しなければ大人数での運動をするのが困難であることや児童数が少ない過疎地域では集団スポーツの部活を成り立たせるために学校側が部活動への加入を推進していることが背景にあると考えられる。このことから過疎地域における運動機会、特に集団スポーツの活動機械の需要は市郊外と相対的に比べて非常に高く、我々の行っている活動がその需要と合致しているのではないかと考える。

一方で、過疎地域の低学年が市郊外の低学年に比べ部活所属率が低くなっているのは、市郊外の方が低学年でも参加可能なスポーツクラブが数多く存在しており市郊外の児童は低学年のうちから所属できることが原因と考えられる。これに対して過疎地域ではそうしたクラブに加入しづらく、学校の部活動が低学年では参加しにくいこととあいまって低学年の所属率が低くなっていると考えられる。

過疎地域の小学生



弘前市郊外の小学生



過疎地域：回答総数 203（複数回答可）

集団スポーツ 134（66%）・個人スポーツ 69（34%）

弘前市郊外：回答総数 1153（複数回答可）

集団スポーツ 454（39%）・個人スポーツ 699（61%）

次に、やってみたいスポーツについてのアンケート結果であるが、過疎地域の小学生の回答のうち集団スポーツの回答数が全体の66%に当たる134あったのに対して、郊外の小学生では集団スポーツの回答数の割合が全体の39%にすぎず過疎地域の小学生ほど集団スポーツの機会を希望している傾向があるとアンケート結果から読み取れる。これは集団スポーツをできる環境が整っている郊外の小学生に比べ、過疎地域の小学生は人数的あるいは場所的な問題で集団スポーツをできる環境があまり整っていないため集団スポーツをしたいという欲求が高いということが背景にあるのではないかと考えられる。

9. まとめ

青森県は平均寿命が全国最下位であり、がんや心臓病罹患率が高い。特に中年層(45～65歳)の死亡率は相対的に高く、全国健康水準と差が大きいことは本県の重要な課題となっている。本取組は将来の健康体をつくることを目標に、子どもの時からの運動習慣の定着を目的とした。そのためには楽しく、勝ち負けにこだわらない活動を広げていき、好きな運動・スポーツを見つけてもらうことが重要だと考えている。

そもそも、活発に運動を行っている子どもたちが運動から遠ざかる原因は何だろうか。部活動の厳しい指導や熾烈なレギュラー争い、子どもたちの遊びの中で運動の不得意な子が隅に追いやられてしまうように、身体を動かす本来の楽しさを見失ってしまうことにあると考えられる。ただし、勝負主義・実力主義が悪いと言っているのではない。指導やレギュラー争いから生まれる向上心はむしろ重要である。しかし、そこからこぼれ落ちた子どもたちを救うものはあるだろうか。彼らを救う役割がどこかになければいけない。また、過疎地域においては人数の制約から可能な運動・スポーツの幅が限定される。事実として、都市部の子どもたちは多くの部活動や民間のスポーツクラブに通うことができるが、過疎地域では野球部しかないことや、付近にスポーツクラブがなく通うことが難しいという現状がある。自分に適した運動・スポーツを見つけることができないというのは問題である。さらに、幼少期から多種多様な運動・スポーツに触れることも運動神経を伸ばす大きな鍵である。そこで、学生が子どもたちに運動・スポーツの楽しさを伝え、運動の機会を広く提供しようと結論づいた。

小学校を訪問し、私たちが企画した運動プログラムを実施する活動を行うことになるが、ノウハウを全く知らないので、NPO スポネットに教えていただけることになった。様々な運動メニュー、子どもたちへの接し方、安全への配慮等を学ぶことができた。学んだことを活かし、2つの小学校で私たち独自の企画を実践した。実際に訪問してみると多くのことがわかるものである。アンケート結果、保護者の反応等から私たちのような活動が望まれていることがよくわかった。

学生らで実際に企画・運営をすることが可能であることが判明した。次に考えるべきは単発的な活動を継続的なものにしていくということである。私たちの活動の最大の目的は子どもたちに楽しんで運動してもらい、運動に対するネガティブ思考

を排除し、将来の健康体をつくることである。このような目的からすると、単発的な活動は目的を達成し得ない可能性が高い。そこで、継続的な活動を行う母体をつくることを考えた。この案が出た際、i) 弘前大学ボランティアセンター内に、ii) サークルとして、つくる2つの案が考えられた。しかし、後者に関しては、実際はサークルには顧問の先生がつくことになっているが適任者を見つけることが難しい点、サークルという実態を小学校の先生方や保護者の方々は好ましく捉えない点があり、活動がスムーズに進まない可能性がある。実際に、ある小学校で学生のみによる活動を行おうと連絡を取ったところ、学生のみでは責任者不在で万が一の場合を考えると好ましくないとの回答があった。以上のことから、弘前大学内のボランティアセンターに運動部門としての組織を設置することを考えたのである。私たちの代で終わらせないためにも、後継者を育てていくシステムの構築は必要不可欠である。

短命県からの脱却のキーワードは食生活と運動であろう。この2つが相互に影響し合い、初めて健康的な長寿を達成しうるものである。前者に関して本県は既に「あおもり食命人（しょくめいじん）育成事業」により大きく前進している。しかし、ことに運動に関しては大きな動きがあるとは言えない。課題は多々あるが、将来の健康体をつくることを見据えたこの計画で、健康長寿県の達成を目指したい。

○ 調査研究に参加しての感想

鹿嶋良介

今回のプロジェクトのような学生が地域の問題とは何か、そのために何が必要なのかを考え、問題解決のため実際に自分たちで行動するという取り組みは大変意義のある活動だった。調査研究で地域の人と協力する中で青森県という地域の健康問題やその特徴がよりリアルに感じることができ、青森県弘前市という地域の人々の人柄をより深く理解できたからである。学生が主体となって地域の問題に対し体当たりで挑戦するという事は学生自身を一人の人間として大きく成長させるだけでなくこれから弘前大学が「地域貢献型大学」としての役割を果たしていく上でも重要ことなのだと感じた。

川端延都

子どもから社会人まで幅広く多くの人と触れ合う活動は、大学での座学では身に着けられない貴重な経験であった。小学生という離れた年代に対し、物事をわかりやすく伝えるために言葉の表現や実演などを行ったが、何もわからない人に物事を教えるということがいかに難しいのかを実感した。また、小学校のPTAの保護者や社会人の方々という目上の人に対し、どのようにしてアポイントメントを取るべきなのか、直接会った時の言葉づかいは正しいのか、行事が終了した後を送るお礼状の文章など、人として失礼の無いように気を付けるべきところでの対応を学べた。非常に有意義で勉強になった。

鈴木貴也

このように青森県について考える機会をいただき、青森県には数多くの問題があることが分かった。私たちの活動では多くの子ども達や保護者の方々、地域の大人達と関わることができ、問題の解決にはあらゆる方面からの支援が必要であることが分かった。多くの人々に運動をしてもらうためにはシステムが必要であり、そのようなシステムが青森県においてはまだ不完全であるといえる。今後も活動を続けシステムの構築に貢献し問題解決を図りたい。

畑中一輝

青森県の現状を知ることができてよかった。

堀春海

今回のプロジェクトを通して、本当にたくさんの方にお世話になった。各小学校の先生やPTAの保護者の方々は、忙しい中で我々のために何度も時間を割いてくださったし、何よりスポネット弘前の協力が無ければこのプロジェクトはすぐに行き詰っていたと思う。最終的に発表までこぎ着けたことも我々の力だけではなく、周囲の方の手助けがあったからだということをお忘れなくしたい。

蒔苗裕太

何にでも醤油をかけてしまう、ジョギングを決意しても続かないなど長年蓄積された生活習慣を変えることは並大抵のことではないです。大人になってから改善を図るのではなく、子どものときから健康的な習慣の定着を図ることは将来の健康体をつくる手段として効果的であり、長寿県達成に遠回りに見えるものの確実な一手だと感じています。また、有識者や小学校関係者の方々と関わりを持つことは、普段の学生生活を送っているだけでは経験できないことであり、良い社会勉強になりました。

三橋弘靖

子供たちと直に触れ合い、生の声をアンケートという形で聞いたのは非常に貴重な機会であり参考になった。問題について調べを進め、解決に向けて議論する中で学外の方との交流の機会もあり様々な意見を聞くことができたのはよい経験であった。この活動を進め発表をまとめる中で様々なお力添えを頂いた関係者の方々へ心から感謝している。

米谷光史

今回のプロジェクトに関して自分たちで企画し、進行していく中で改めて青森県の現状について深く考えることができた。活動していくなかで貴重な体験もすることができてよかった。

「農の魅力、子どもに発信！」

弘前大学 金目ゼミ

谷尾詩織

並松佑磨

野呂桃華

松田拓也

三丸真由子

村上大輔

山内美朱紀

1. 課題設定

(1) 活動の概要

本研究では、就農体験で得たことを紙芝居とハンドブックに表現し、その読み聞かせや配付を行う活動を実施する。これらの方法で、子どもたちをメインに農業の魅力や食の大切さを伝えていく。

(2) きっかけ

そもそも、私たちの活動の原点は、「弘前大学の学生として、何か地域に貢献したい。」という思いにある。そして、農業への親近感や農家さんが身近な存在として大きいという理由から、農業に着目した。実際に弘前市は、農業の生産高が上位かつ地域資源が豊富であるという強みがあり、農業が盛んな地域である。しかし、その反面、市の農業従事者の人口は年々減少しており、農業従事者の高齢化や後継者不足といった問題を抱えているという現状もある。

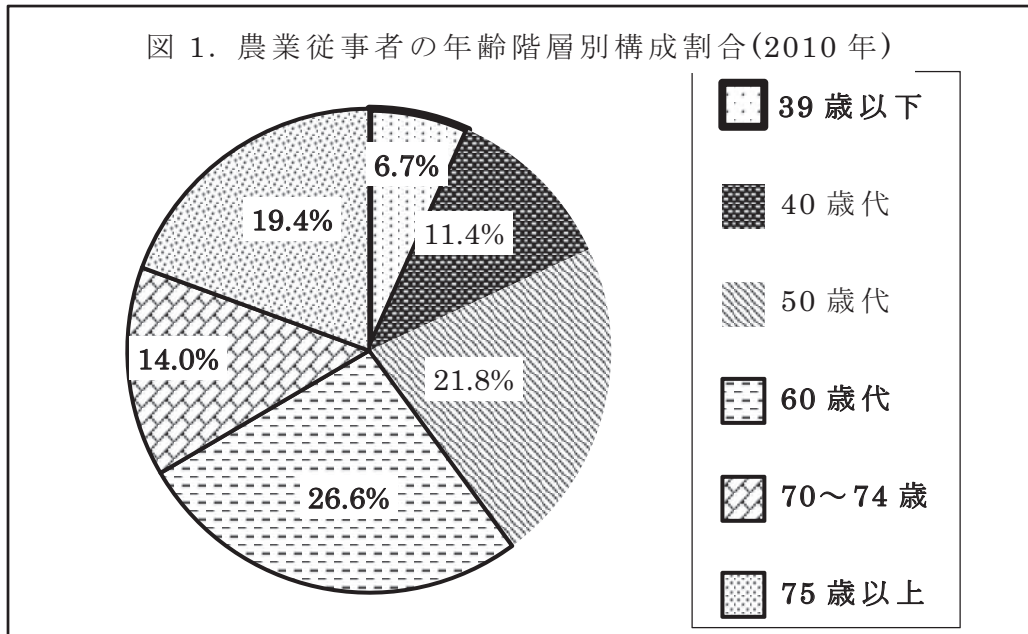
(3) 問題意識

まず、懸念されることとして、弘前市内の子どもたちの「農」に対する関心が低いのではないか、その関心の低さから後継者不足が生じているのではないか、という見解に至った。実際に、弘前市の農業従事者の年齢階層別構成割合(図 1)を見ると、60歳代から75歳以上までの割合は約60%を占め、高齢化が顕著に表れている反面、39歳以下の割合は、わずか6.7%となっている。しかし、このような後継者不足解消に直結する具体的な方法を提示するのは、なかなか困難を極める。

(4) ターゲットと目的

(3)で挙げられた問題を解決するために、私たち学生の視点から、まず、未来を担う「子どもたち」に着眼点を置いた。対象とする子どもたちの年齢は、幼稚園の年長さんから小学校低学年とした。その中でも特に、都市部に暮らす子どもたちを対象とした。その理由は、都市部はその地理的性質上、農業に接する機会が農村部に比べてあまり無く、子どもたちは農業への関心が薄い環境にあるのではないかと判断したためである。そして、「食育を推進することを通して、農業や食への興味・関心を喚起する」という目的を設定した。また、活動効果の対象は子どものみでなく、親世代にも目を向け、親から子への食育を促すことも視野に入れている。

図 1. 農業従事者の年齢階層別構成割合(2010年)



資料：弘前市 HP>市の概要>農林業センサス>「弘前市の農業」
 2010年世界農林業センサス農業経営体調査結果書
 (<http://www.city.hirosaki.aomori.jp/gaiyo/tokei/nouringyou/file/2010kekkasho.pdf>)

2. 実地体験

(1) 実地体験へ

私たちは、目的を達成するために、農家さんへのヒアリング調査や自らが就農体験をしたことで、得たり感じ取ったりしたことを、子どもたちへ発信するメッセージの材料にしたいと考えた。そこで、私たちは、活動の手始めとして、葉つきこかぶの栽培が盛んである野辺地町で就農体験をした。2014年7月27日の夜中の0時に弘前を出発し、車で3時間かけ、野辺地町の農家さんのもとへ向い、以下のようなスケジュールで就農体験を行った。

3：00～6：00	収穫作業
7：00～12：00	洗浄・選別・出荷作業
13：00～15：00	種まき・間引き作業



(2) こかぶ選定理由

こかぶを選定した理由は以下の2点である。

- ①弘前市の全ての市立小学校で採用されている小学1年生の教科書に「おおきなこかぶ」という話を取り上げられており、子どもたちの心をつかみやすいのではないかと考えたため。
- ②こかぶは、ご家庭でも簡単に自家栽培ができ、それを食することができるという魅力のある食材であることから、家庭内の食育推進につながるのではないかと考えたため。

(3) ヒアリング調査

私たちは、ヒアリング調査により、農家さんが以下のような思いを抱えていることが分かった。

- ・「今の若者は農業の大変さを知らないのではないか。」
- ・「若者の力が欲しい。」
- ・「こかぶの収穫時期はとても忙しい。」
- ・「年をとると、もっと作業がきつくなった。」

(4) 就農体験後の感想

就農体験後の感想をゼミ生同士で出し合った結果、以下のような感想が出た。

- ・「こかぶの収穫作業は、葉っぱを傷つけないようにしなければいけないので初心者にとっては難しい作業であった。」
- ・「畑から作業場までの往復は体力を必要とするので大変であった。」
- ・「就農体験のほとんど重労働だった。」
- ・「農作業は大変な仕事だったがその分やりがいがあった。」



以上を踏まえ、私たちは、就農体験を通じて農業の大変さを知ることや農家さんの思いをひしひしと受け取ることができ、それと同時に本活動への意欲もさらに湧き上がった。

3. 方法・内容

(1) 事業展開

就農体験の感想を踏まえた上で、子どもたちが楽しくわかりやすく農業や食に関心を持ってくれるように、「紙芝居」と「ハンドブック(冊子)」を作成した。

① 紙芝居

紙芝居は、こかぶが育ち、出荷され、私たちの元に届くまでの一連の流れを「こかぶくん」と「こかぶちゃん」(オリジナルのキャラクター)が教えてくれる内容となっている。紙芝居の中ほどでは、こかぶだけでなくみんなが普段口にしている野菜も手間暇をかけて作られていることを子どもたちに認知させ、好き嫌いなく野菜を食べる動機づけを与える。さらに、紙芝居の結末には、こかぶをはじめとする野菜を食べれば、病気に負けない元気で丈夫な体をつくれることや、農業はみんなの食を支えているすばらしい仕事である

といったメッセージを発信し、農業や食の大切さを伝える構成になっている。

ここで、紙芝居ならではの利点について述べる。確かに、現行の農業体験を通じた食育では、直接経験することで、食の大切さを体感できるが、その一方で、“種まきだけ”“収穫だけ”といったように作業の一端を切り取っただけの体験に過ぎないという問題がある。これに対し、私たちが行う紙芝居は、種まきから口に入るまでのストーリーを一気に見せることができ、なおかつ、演出を工夫することで子どもたちが最後まで興味を持って話を聞いてくれるという利点があり、子どもたちの心に長きにわたって残りやすいといえるだろう。

なお、制作にあたって、野菜の粉末が原料となっている「お野菜クレヨン」を使用し、野菜そのものの素材感を出すことで、子どもたちの野菜への親しみをより高める工夫を施した。



②ハンドブック

ハンドブックは、作成した紙芝居を絵本風に仕立てたもの、私たち大学生が考案したおかずのレシピ、弘前市で採れる野菜の紹介、子どもや親へ向けた食や農業に関連したメッセージなど、盛り沢山な内容となっている。

どのコンテンツも食や農業への好奇心を刺激するものとなっているが、とりわけ大事なのが子世代および親世代へ向けたメッセージである。子世代に対しては、農家さんの担い手が年々減少している実情を伝えて農業に興味を持って野菜を大事に食べてほしいというメッセージを掲げた。親世代(保護者の方)に対しては、ご家庭内でもぜひ自分のお子さんへの「食育」を推進していただきたいというメッセージを掲げた。

このハンドブックは、紙芝居を見に来てくれた方に加え、市内の都市部に位置する小学校(文京・桔梗野・大成)、診療所を選定し、配付した。個人への配付だけでなく、小学校には1、2年生の各教室に、診療所には待合室等にハンドブックを設置していただいたので、この先多くの親子の目に触れてほしいと願う。

この紙芝居の読み聞かせとハンドブックの配付を軸にして、事業を展開していった。具体的な主たる活動場所は、岩木図書館・岩木中央公民館・弘前みなみ幼稚園である。

また、この事業が狙う効果の確認や、親から子への食育を促す資料作りのため、アンケートを作成し、実施した。

(2)事業を進めるにあたって

私たちは、就農体験を生かして、私たちが住んでいる弘前市に何か貢献したいという思いや紙芝居やハンドブックの制作において資金面での後押しをいただき、私たちの活動をより強力におしすすめたいという思いから、弘前市の広報や

HP に掲載されていた「弘前市市民参加型 1%システム」という公募型の補助金制度に応募した。

この補助金制度は、個人市民税の1%に相当する額を財源として市民によるまちづくりを援助するものである。

ご支援をいただくにあたって私たちは審査会で思いの丈を伝えた。

審査会では、「本当にこれで食や農業への関心を高めることができるのか？」などといった厳しいご意見もあったが、一方で、活動での気付きや大学での学びと合わせて化学反応を起こしてほしいといった期待する声もあり、無事採択していただいた。ただ、食育活動の大変さや難しさを認識している大人の意見に一時は意気消沈したこともあった。

しかし、その上で、私たちは自らの活動を再度見つめなおし、2つの点について活動の意義を見出した。



①食育活動が難しいということを受け、活動の実施が減少し、これにより子どもへの関心がより一層薄れてしまうことで、食育活動がますます難しくなるという悪循環が発生する可能性があるのではないかと捉え、これが実現してしまう事は農業が盛んな弘前市の将来発展を見据えた上で、あってはならないことである。

②厳しい意見を受け、食育の困難性を痛感したが、子どもたちの食・それを作る農業への関心を高めるといった意識をもたらすためには地道な活動を一步一步積み重ねていく方法が必要不可欠である。

4. 事業の効果

本事業において期待できる効果は3つある。その内訳は、主な効果が2つ、付随的な効果が1つとなっている。

(1) 主な効果

◎子どもたちの「食」を大切にする思いを育む

→子どもたちは、紙芝居やハンドブックを通して、農産物の種まきから収穫、そして自分の口に入るまでのストーリーを知る。そして、農業が食を支えていることを改めて実感し、「食」を大切にしようとする思いが育まれる。

◎家庭内での食育の拡大作用

→ハンドブックを読み、関心を持った方が家庭内で野菜栽培を行うことで、親子含めて実体験を通じた学びができる。そして、家庭内でのさらなる食育の推進につながる。

(2) 付随的な効果

○野菜を摂取する機会が増えて健康 UP

→子どもたちは、紙芝居やハンドブックを通して、普段口にかけている野菜が手間暇をかけて作られていることを知る。そして、料理を作ってくれるお母さ

ん・お父さんとの会話の中で野菜に関する話題が持ち出されることが増える。こうして、親子が野菜に関心を持つようになることで、子どもたちは親しみを持って野菜を食べるようになり、親も野菜を積極的に料理するようになり、結果として親子の健康増進が期待される。

これらの効果は決して短期的に表れるものではない。長い目で見ること、本活動の効果が徐々に明らかになってくると考えている。そのため、本活動はこれから先も市内の多くの場所で行われていくことが望まれる。

今年度の活動だけでは、上記3つの効果があったのかをうかがい知るのなかなか難しいが、子どもたちが農業や食に興味を抱くきっかけの1つとなったであろうことを期待する。

5. 実際の活動

(1) 紙芝居の読み聞かせと冊子配付

1回目の活動は、2014年11月23日に岩木図書館の「図書館まつり」に参加させていただく形で行った。開始30分前に親子連れの方々を中心に宣伝を行ったが、宣伝を受けて来てくれたお客さんは思った以上に少なく、非常に残念だった。

紙芝居の読み聞かせに関しては、本活動が初めてだったので、不安もたくさんあったが、ほとんどの子どもが最後まで真剣に聞いてくれたことや普段から絵本や紙芝居の読み聞かせを行っている紙芝居のベテランの方々からお褒めの言葉をいただいたことから自信につながった。しかし、紙芝居を聞いてくれた子どもの中には、集中してくれなかった子や対象年齢よりも若干幼い子もいたので、紙芝居の内容を十分に伝えることができなかったのではないかと感じた。

また、ハンドブックに関しては紙芝居の来場者数が少なく、大量に余ったため、急遽、読み聞かせの終了後に紙芝居への参加有無に関わらず対象年齢を満たしていそうな子どもたちや、対象年齢のお子さん・お孫さんを持つ大人の方を探して配付をした。実際に、快く受け取ってくださった方々が多く、私たちも積極的に声をかけたことで全て配りきることができた。ハンドブックの中身についても高評価だったのでとても励みになった。

本活動を通して、私たちは、イベントに参加させていただく形の際には事前の宣伝をしっかり行うことや紙芝居の読み聞かせをする際には、身振り手振りを恥ずかしがらずにもっと付け加えたり、子どもとの対話形式にしたりするなどの工夫を施し、紙芝居の世界により引き込ませるようにこころがけることが大事であると学んだ。今後の活動においても本活動の反省点を生かしていきたいと思った。



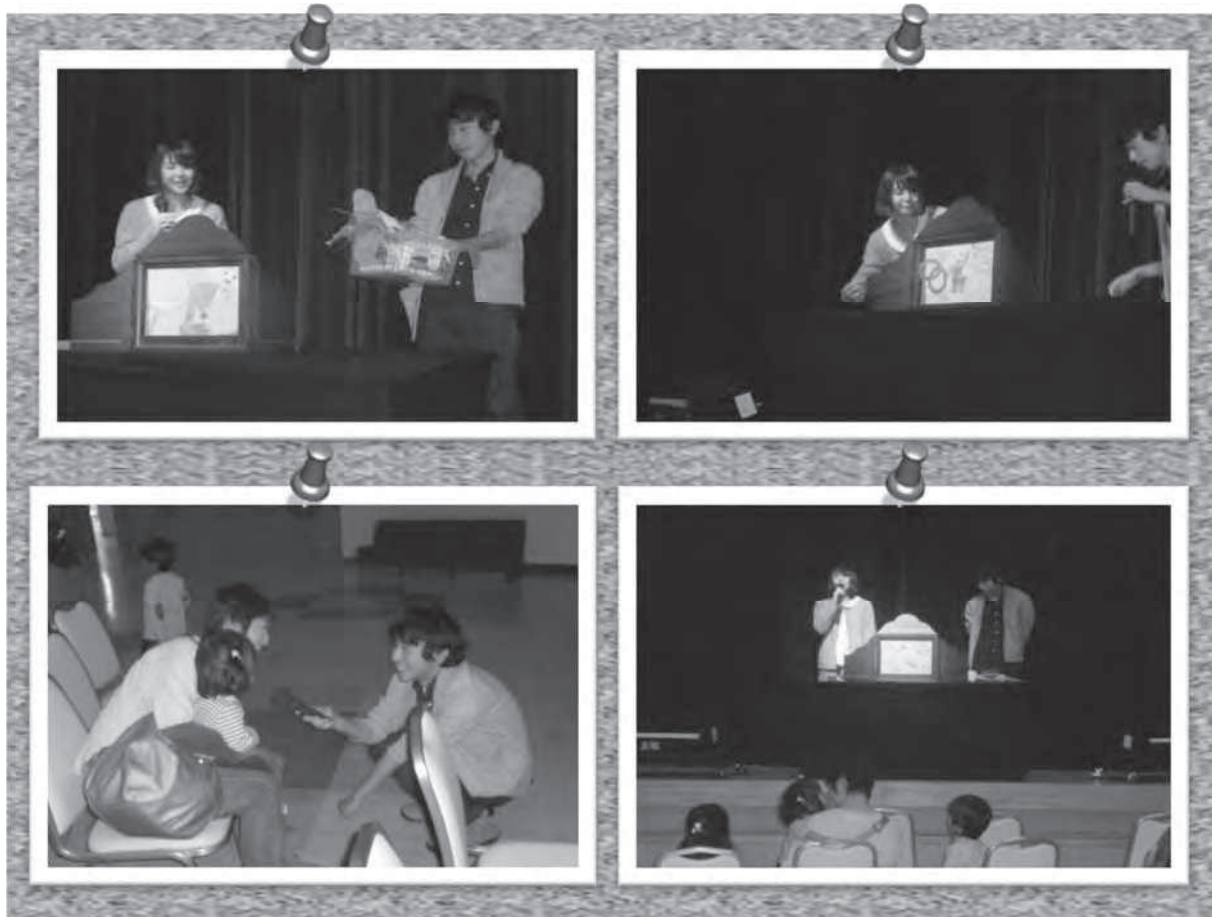
2回目の活動は、2014年12月15日に弘前みなみ幼稚園で、年長さんと年中さん合わせて50人とその先生方を対象に、行った。1回目の反省点を踏まえ、紙芝居に身振り手振りや子どもたちとの対話形式を新たに導入した。それらが功を奏したのか、園児たちとの距離感を縮めることができ、反応が格段に良くなった。また、紙芝居を通して、こかぶに興味を持ったり、農業や食の大切さを理解してくれたりした子が多いという正の結果を得ることができ、幼稚園教諭の方々からも高評価をいただいた。さらに、みなみ幼稚園では、そもそも就農体験が盛んに実施されており、それとセットで考えると、紙芝居や冊子の効果が一段と高まったと言える。総じて、子どもたちに楽しく伝えることと、教育として食育を推進することのバランスが上手くとれていたと評価できる。

ただし、本活動は、子どもたちに将来の職業選択の1つとして農業を考えさせるための動機づけとしては不十分かもしれない。例えば、後継者不足問題に絡む内容を紙芝居の脚本上で触れる、身内に野菜を育てている人がいれば、手伝ってあげてほしいというメッセージを投げかけることも含めるのも良いかもしれない。その一方で、農家の魅力をもっと伝える工夫をし、「夢」を与えていくことが大事であろう。そのためには、紙芝居ならではのメリット(食のストーリーが一気にわかる、食のストーリーと同時に食や農の魅力も伝えられる、子どもの心に響きやすいなど)を意識し、それをもっと十分に活かすようにしなければならない。また、年齢が1つ違うだけでも、子どもたちの反応に微妙な差があるので、年齢に応じた柔軟な調整を心がけるのも大切であろう。



3回目の活動は、2014年12月20日に岩木公民館主催で開催された「クリスマス会」というイベントに参加させていただくかたちで行った。私たちは正規の参加団体ではなかったので、イベントの空き時間である昼の時間帯に紙芝居の発表することになった。午前中は多くの親子連れが会場内におり、この状態であればたくさんの子どもに紙芝居を見てもらえるだろうという期待が高かったが、諸般の事情により、昼頃には子どもたちの数が激減してしまった。会場の後ろ側には遊具スペースが設営され、ほとんどの子どもたちはそこで夢中になって遊んでいたこともあり、結果として、紙芝居を見てくださった方は、親子合わせて数人であった。多くの方に見てもらえず、とても残念であった。また、舞台照明の影響により、脚本が見づらく、読み聞かせが少したどたどしくなってしまった。しかし、それでも最後までやり遂げることができたのでよかった。

このクリスマス会での活動で、イベントの1つの催しとして活動することの厳しさを痛感した。観客の出入りは頻繁であり、子どもたちを私たちの活動に引き付けるのも難しかった。なので、紙芝居を聞いていなくても答えられるアンケートも用意する必要があったと感じた。



4回目の活動は、2014年12月23日に中央公民館岩木館にてNPO法人「アフタースクール」の主催とするクリスマス会に参加させていただく形で行った。

クリスマス会での催し物として、他団体との合同で実施されたのだが、その中の一団体である弘前大学のサークル「Kids」も本活動と同じ方向性を持った「学び」を題材とした人形劇の発表であった。人形劇を見ている子どもたちの様子が

意欲的で、かつ楽しんでいる姿勢が見えたことなどを受け、伝えるための工夫というものがいかに重要であるのかという事を再度認識させられたと共に、伝えるに当たっては「おもしろさ」と「学び」との均衡を保った効果的な食育活動を実施することの難しさというものをより実感した。

また、今回は他団体の学生が私たちの発表の際、場の空気を盛り上げてくれたことなどを受け、子どもたちが意欲的に聞いてくれたことや、質問に対して活発に答えてくれた。このことから、場の空気感が子どもたちの参加姿勢に大きく影響を及ぼすということを実感し、重要な要素であるということに確信を持った。今回のように複数団体が共同で活動し、お互いをサポートしあうことでそれぞれの活動における期待する効果をより高めることに繋げることができるのではないかと思った。

紙芝居での「食育」の効果がこれからも継続されていくのかを確認することは難しいといえるが、本事業で表面的な変化ではなく実質的な変化をもたらしたことを期待したい。



(2) (1) + 料理講座

2015年1月24日に、中央公民館岩木館で、ひろさきアフタースクールという団体とともに、「市民先生」としてこかぶの料理講座を実施した。ちなみに、ひろさきアフタースクールとは同じく1%事業のご支援を受けながら、弘前市の「放課後」教育にスポットをあてた「子育て支援」のプログラムを提供している団体である。開始1時間前に会場入りし、材料の確認、調理器具や食器の所在の把握、下ごしらえに取り掛かった。しかし、予想以上に手こずって時間を要してしまい、開始時間を過ぎてしまったというハプニングに見舞われたので、用意周到を心掛けることの大事さを開始早々再認識した。料理前に、5回目となる紙芝居の読み聞かせを行った。事前練習の時間も取れなかったので、少々不安だった。しかし、それとは裏腹に、ほぼミスなく進行することができ、子どもたちの反応もよかった。料理中は、各テーブルで作業スピードにはばらつきがあったので、統一するのはなかなか困難であったが、参加者の方々は、自分たちの指示に最後まで熱心に耳を傾けてくださった。また、積極的に携わろうとする子どもたちが多く、特におにぎりを作っている時の表情は楽しそうであった。料理後は、元々

かぶに対して苦手意識を持っていた子が、自らの手で料理することを通じて、かぶを進んで食べられるようになった様子を見られたことがこの日 1 番の収穫であった。さらに、おいしそうな表情を浮かべながら、「楽しかった。」や「またやりたい。」といった子どもたちの声を耳にすることができ、大変嬉しかった。

今回の活動では、紙芝居の読み聞かせと料理をセットで行うことで、紙芝居後の反応だけでなく、料理や食事をしている間の親子同士の会話を垣間見することもできるし、何より家庭内での食育推進や食への関心が高まるという活動の効果を一段と高めることができると実感している。また、比較的なじみの薄いかぶだが、実物を手に取ってもらうことで、身近に感じてもらったことを嬉しく思う。かぶは、和洋折衷どの料理にも使用でき、短時間で味のしみやすい万能な食材であるため、レシピの考案も比較的しやすい。よって、家庭でも簡単に料理することのできるため、冊子とセットで考えると、効果の持続性もより見込めるであろう。



6. アンケート結果の分析

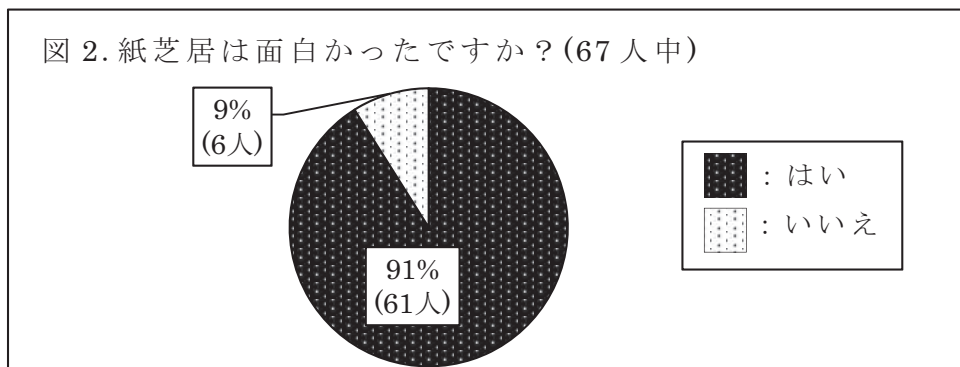
私たちの行った活動の効果を確かめ、今後の課題を考えるために、アンケートを行った。紙芝居を観覧した子どもたちや親世代を対象に、2014年11月23日～2015年1月24日にかけて、市内の図書館や公民館、幼稚園などで実施した。以下のと

おり、紙芝居を通して子どもたちや親世代の「食や農業」に関する意識変化や感想を確かめるとともに、食育の浸透度や農業へのイメージを再確認することとした。

(1) 子世代^{※1}

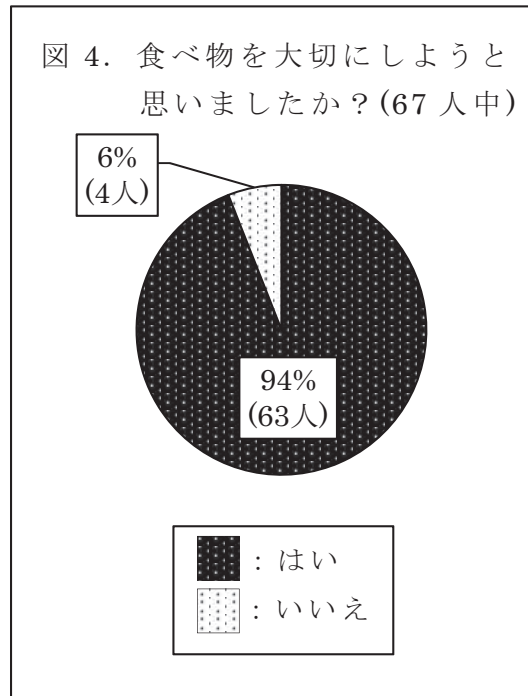
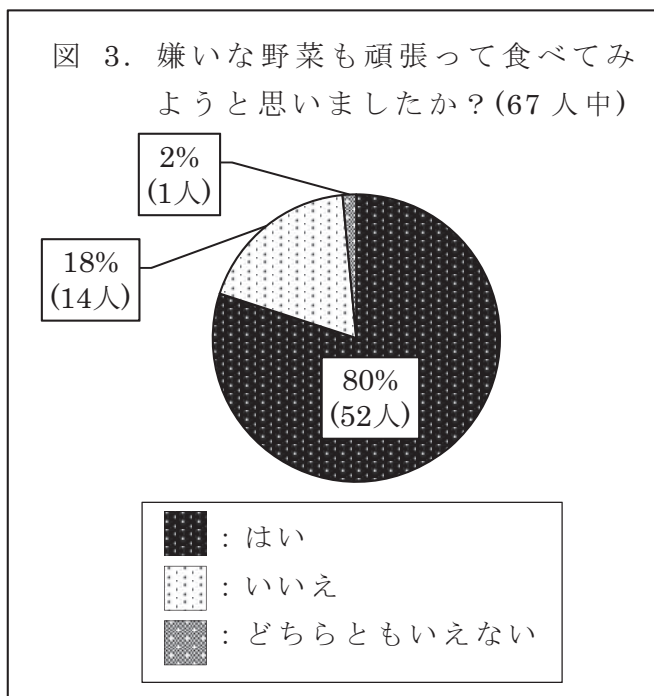
① 紙芝居に対するリアクション ▶図 2

親しみやすさを意識した工夫を積極的に取り入れたことが功を奏し、約 9割が面白かったと回答。よって、紙芝居は、子どもの興味を惹きつける有効な手立てであったと言える。



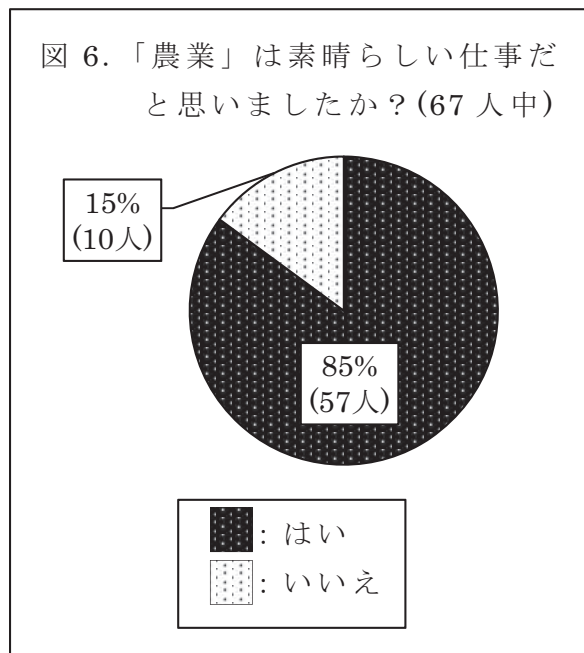
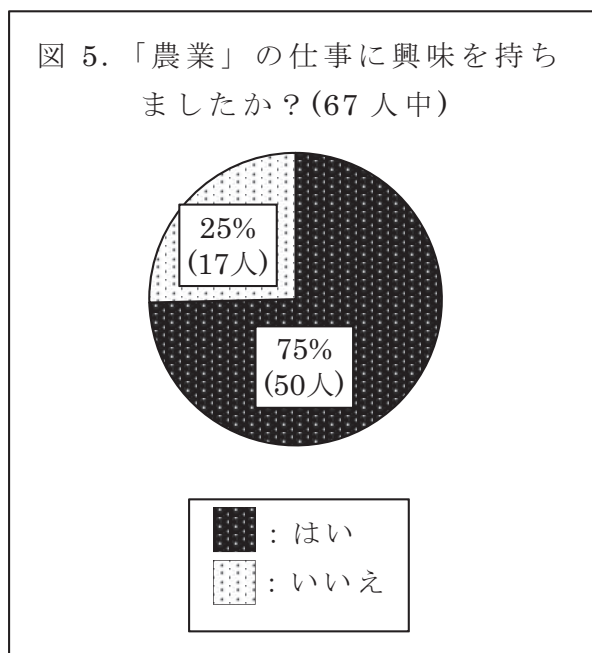
② 食育への貢献度 ▶図 3、4

94%が食の大切さを実感。また、80%もの苦手意識の克服に寄与できたと言える。ただし、実際に好き嫌いをせず、残さず食べるようになったか、食べものを粗末にしていなかったかなど、実質的な効果を垣間見ることは困難であるため、やはり料理教室をセットで開催するなど、何らかの補強策が必要である。



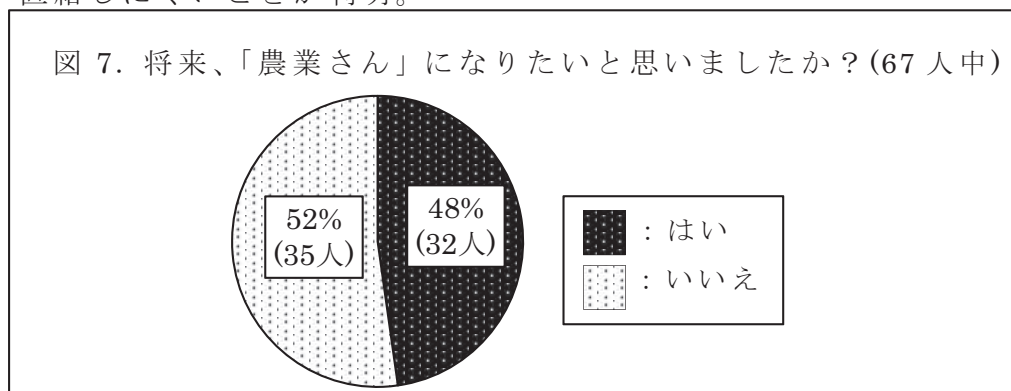
③農業への関心度 ▶図 5、6

農業に対して、75%が興味を抱き、85%が素晴らしい仕事であると認識。よって、農業の魅力を発信することに尽力できたと言える。



④農家さんへの憧れ度 ▶図 7

農家さんに憧れを抱いたのは 48%で、半数には満たなかった。憧れ度とは直結しにくいことが判明。



(2)親世代^{※2}

①弘前市の農業に対するイメージ ▶図 8、9、10

やりがいがあると回答したのは 52%と半数に達したものの、特に収入面や体力面において負のイメージが見受けられる。その結果、農業をやらせてみようという思いに至らないのではないかと推測できる。また、後継者不足の認知度は、今まさに直面している問題なだけあり、87%と高い。

図 8. 弘前市の農業に対するイメージ【やりがい】(64人中)

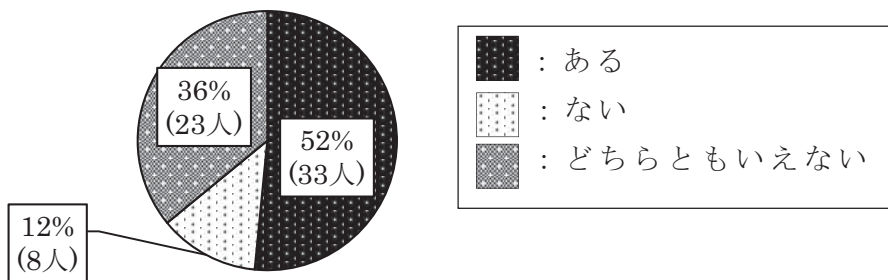


図 9. 弘前市の農業に対するイメージ【収入】(64人中)

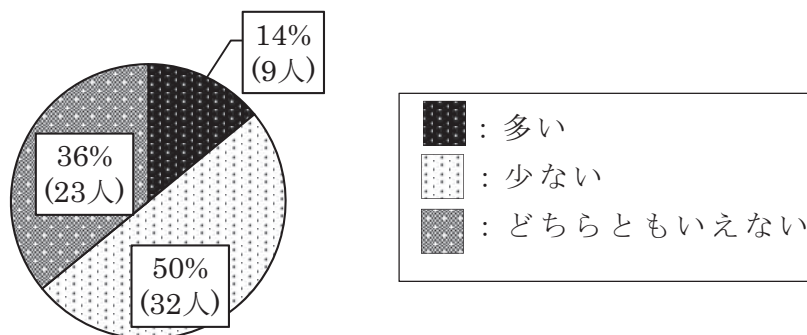
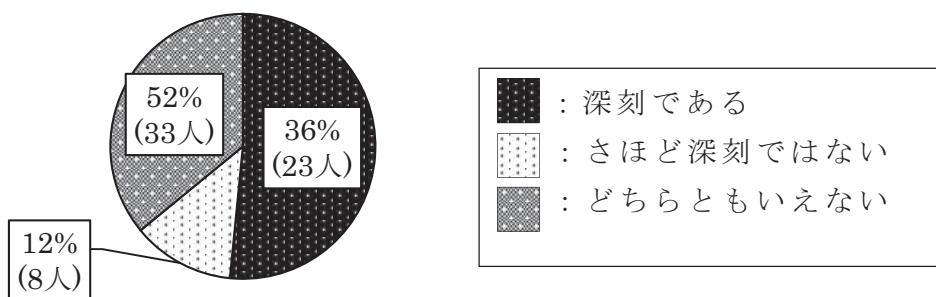


図 10. 弘前市の農業に対するイメージ【後継者不足】(64人中)



②家庭内での食育の浸透度 ▶図 11、12

やや高めではあるが、好き嫌いなく食べさせる工夫を実践している親世代の数は若干劣る。これより、家庭では、精神面における食育が、実践面における食育よりも少し高いことが分かる。

図 11. 普段、家庭内で子どもに対して食育(食べ物や栄養バランスの大切さを伝えるなど)を行っていますか?(64人中)

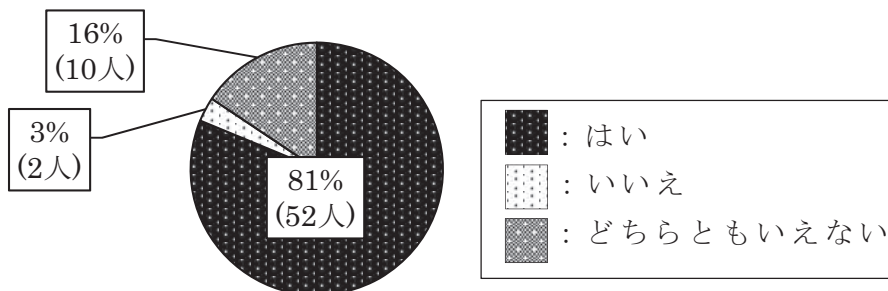
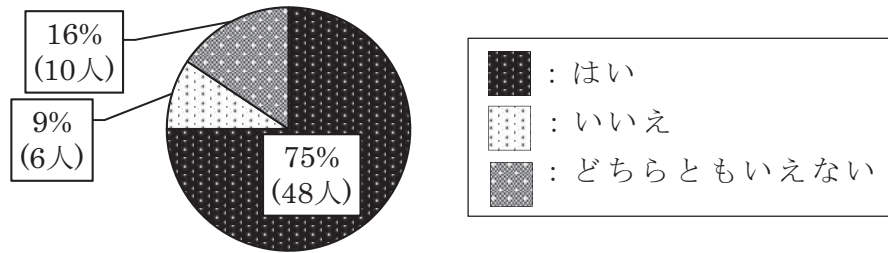


図 12. 子どもに嫌いな野菜を食べさせるための工夫を行っていますか？(64人中)



③活動に対する評価 ▶図 13、14、15

活動に対して新鮮さを覚え、紙芝居の中身も高評価で、100%が食の大切さを子世代にも伝えていきたいと回答し、89%が農業の魅力を伝達していきたいと回答。また、期待する声も多く、活動を推進する意義は十分にあり、手ごたえを感じることができる。

図 13. 紙芝居を通して、子どもたちに農業や食への関心を高めようとするこの活動は、新鮮なものでしたか？(28人中)

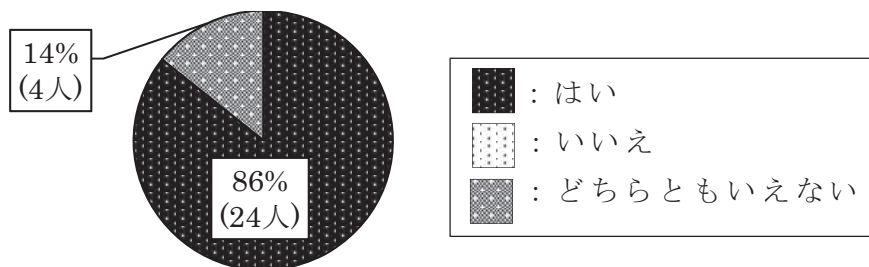


図 14. 食べ物の大切さを子世代にも伝えていきたいと思いましたが？(28人中)

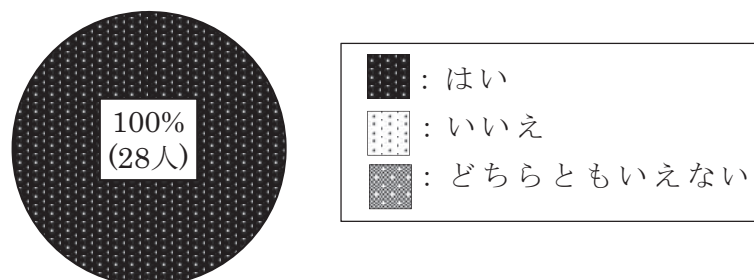
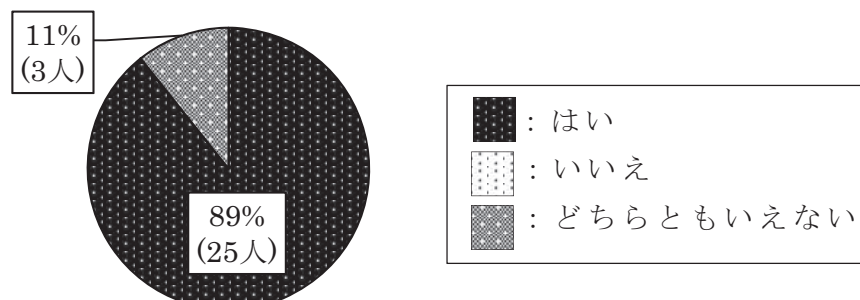


図 15. 農業の魅力を子世代にも伝えていきたいと思いましたが？(28人中)



7. 総括

以上を踏まえて、食のストーリーを交えた紙芝居を用いた食育活動は、どうしても着目点が食の大切さに偏ってしまう家庭内での食育と比較して、食の大切さと農業の魅力のバランスよく伝えることができる。総じて、本活動は、既存の他の食育方法と差異(異なる特徴)があり、新たな食育の形だといえる。子どもたちが農業に関心を抱く、好き嫌いなく野菜を食べるようにがんばるといった意識を持つのは比較的容易に行われやすい。しかし、その反面、子どもたちは憧れを抱きやすい夢のある仕事(パイロットやパティシエなど)を既に心の内に理想としていることが多い。そのため、農業に興味を持って、その興味が農家になりたいという希望にまではなかなか転換しにくい内的背景がありうる。よって、農家さんになりたいという意欲を喚起させるためには、もう一步踏み込んだコンテンツが必要なかもしれない。さらに、外的背景としては、親世代をはじめ、負のイメージを抱いていることがある。しかし、蓄積してしまう負の要因を親の世代から払拭しない限り、後継者不足の解消は見込めない。私たちの活動に対して社会人の先輩方からお寄せいただいたご意見も踏まえて、何より自然災害から受ける影響を考慮した収入を安定させる仕組みづくりの構築が大前提として必要である。また、農家さんになりたいと考える若者に対して、関連した知識を学ばせたり、ベテランの農家さんと触れ合ったりする農業教育の機会の提供や農家さんになるまでのプロセスを明確化するというプログラムを取り入れるべきである。そうすることで、親が元々農家ではない人に農業という職に就いてもらえる可能性も高まる。紙芝居を用いた食育に加えて、学んだ後に食べて分かち合うという実践を厭わず、こうした対策も推進されていくことが重要である。

8. 感想

活動を通して、何か行動を起こせば、予期せぬハプニングに出くわすことがありますが、物怖じせず、臨機応変に対処したいと改めて痛感しました。また、何か行動を起こせば、逆境に立たされることもあります。そんな時こそ、思いやりの心を忘れてならないとしみじみ思いました。

活動自体は決して平たんな道ではありませんでしたが、多くの方に支えられたり、学生の若い力を十分に発揮してこれからもいろいろな場所で活動を行ってほしいという励みのお言葉をいただいたりして、おかげさまで無事にやり遂げることができました。この活動の場を提供して下さった方々へ改めて感謝の意を表したいと思います。

※1 子世代の補足情報

- ・集計数：67人
- ・子どもの年齢

3～4歳	5～6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	無回答	計
22人	27人	2人	3人	1人	1人	11人	67人

※2 親世代の補足情報

- ・集計数：図8～12が64人 図13～15が36人(うち8人が無回答)
- ・親世代の年齢層(ヒロロスクエアでの回答者を除く)

10代	20代	30代	40代	50代	60代	計
0人	5人	10人	15人	2人	4人	36人

- ・親世代の職業(ヒロロスクエアでの回答者を除く)

農家	会社員	教員	公務員	医療系	パート	主婦	その他	無回答	計
2人	7人	1人	2人	1人	6人	14人	1人	2人	36人

紙芝居(金目ゼミ補足資料)



1. 表紙



2. たねまき



3. まびき



4. しゅうかく



5. えらぶ・はとり



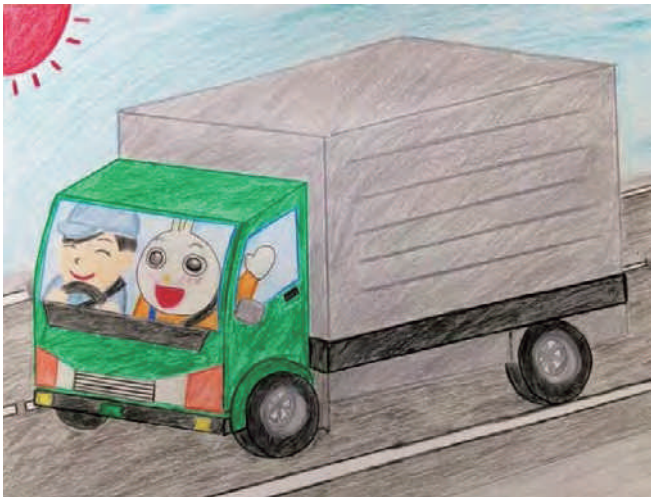
6. あらう



7. わける



8. はこにつめる



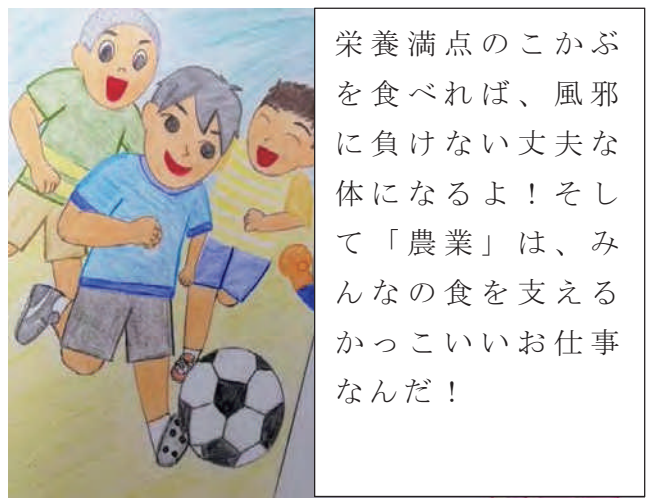
9. とどける



10. りょうり



11. いただきます



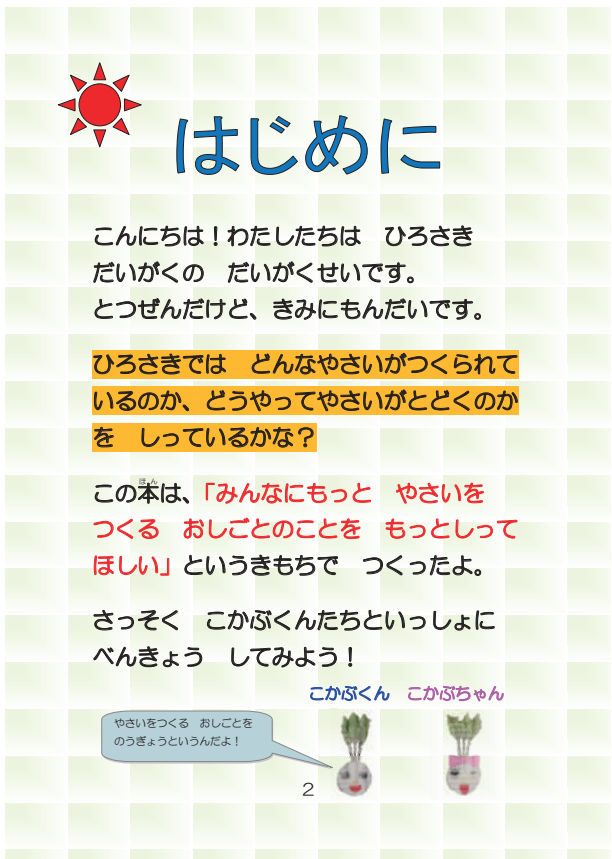
栄養満点のこかぶを食べれば、風邪に負けない丈夫な体になるよ！そして「農業」は、みんなの食を支えるカッコいいお仕事なんだ！

12. まとめ

ハンドブック(金目ゼミ補足資料)



「弘前市市民参加型1%システム」の支援のもと、制作・発行しております。

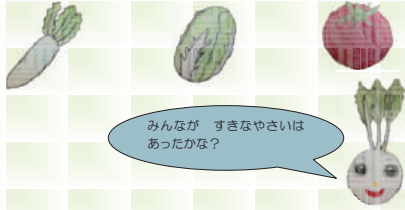


ひろさきのやさい

～みんながくらしている ひろさきでは
どんなやさいがあるのかな？～

ひろさきで たくさんとれるやさい

○だいこん ○はくさい ○とまと



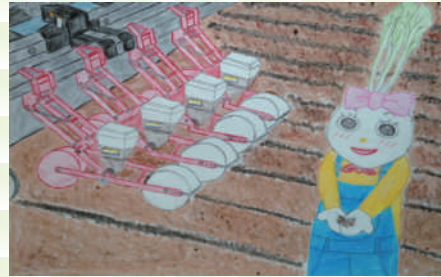
ひろさきしは あおもりけんの
なかでも やさいをたくさん
つくっているまち なんだよ！

つぎのページから こかぶが みんなの
もとへとどくまでを みていくよ！

3

こかぶがみんなへとどくまで

～たねまき～



まずは、たねをまいていくよ。

たねまきは
きかいをつかうんだ。
まっすぐまくのは
とってもむずかしいよ。



こかぶのたね

4

～まびき～



これは、めがはえた はっぱを すこし
ぬいているようすだよ。
これを「まびき」というんだ。おひさま
をいっぱいあびて、こかぶが りっぱな
やさいになるために ひつようなこと
なんだよ。

まびきで ぬいたはっぱを
つけた りょうりも
あるんだよ！



5

～しゅうかく～



こかぶを ていねいにぬきます。
しんせんな こかぶをとどけるために
おひさまがでるまえの あさはやくに
やるよ。

こかぶをきすつけない
ように きをつけて！



6

～えらぶ・はとり～



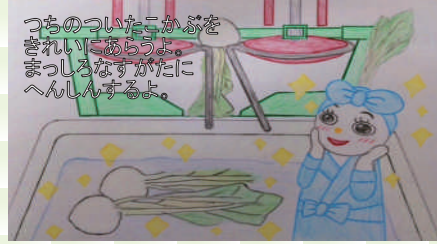
こかぶの
はっぱを ぬいたり、きったりして
ちょうどいい おおきさに
ととのえていくよ。



7

むしがたべてたり きたない
はっぱは いやだもんね！

～あらう～



～わける～



おおきなこかぶと ちいさなこかぶに
わけるよ。

8

～はこづめ～



おおきさごとにわけた
こかぶを はこにつめるよ。



9

しゅうかくして
すぐだから とってもしんせん
だね！

～とどける～



みんなのもとに おいしいこかぶが
はこばれるよ。



10

～りょうりする～



とどいたやさいは
おいしく りょうりしてね！
うしろのページに レシピが
あるから つくってみてね。



11



～いただきます～



いっしょけんめい つくった
のうかさんのためにも
おいしくたべてね！



のこさず
たべてくれると うれしい
な！

12



こかぶを食べて
元気いっぱい！
農業はみんなの
食を支える素敵
なお仕事だよ！

やさいには えいようが たくさん
あるんだ。

かぶは、かぜをひかない じょうぶな
からだをつくったり ほねをつよく
するんだよ。

やさいをもりもりたべて げんきな
からだを つくろうね！



13



弘前大学
学生者実☆★

かぶのかんたんレシピ



かぶがしゃき
しゃきして、お
いしいよ！

～かぶのパスタ(一人分)～

- かぶ 2株
- ツナ缶 半分
- めんつゆ 適量
- マヨネーズ 適量
- 塩コショウ 適量

1. パスタとかぶの葉を茹でる
2. 全部混ぜる

～かぶのあんかけ(二人分)～

- かぶ 2株
- 豚ひき肉 50g
- めんつゆ 大さじ1
- みりん 小さじ1
- 酒 適量
- 砂糖 適量
- 水溶き片栗粉

ご飯にかけても
おいしいよ！



1. ひき肉を炒める
2. 切ったかぶと葉を入れ、水も入れる
3. 調味料を入れ、煮る
4. 水溶き片栗粉を入れる

14

～雑菜～

1. 葉を塩ゆでにして、小口切りにする
2. ごま油で炒める
3. 醤油・ほんだし・みりんで蒸かす

ご飯や白飯・茹でた
ラーメンにトッピング
するといよいよ!

甘酢に漬けて、
ピクルスに!



カロテンたっぷりの
葉を味噌汁の具に!



- 葉を茹でて、ドレッシングで和えるのもよし
- コンソメで煮るのもよし
- 主が一番おいしい!
- 味噌マヨネーズをつけてもおいしいよ!

簡単だから みんなもつくってみよう!

みんなにつたえたいこと

のうぎょうが どんなおしごとかを べんき
ようできたかな?



たくさんのひとが がんばっているおかげで
みんなのところに おいしいやさいが とどく
ことを わかってくれたらうれしいな。



やさいは のうかの おじいちゃん・おばあ
ちゃんたちが がんばってつくっているんだよ。

だけど じつは、さいきん やさいをつくる
ひとがどんどんすくなくなってきたんだ。

だから、のうかさんのためにも やさいを
むだなく おいしくたべようね!



のうかさん! おいしい
やさいを いつもありがとう!



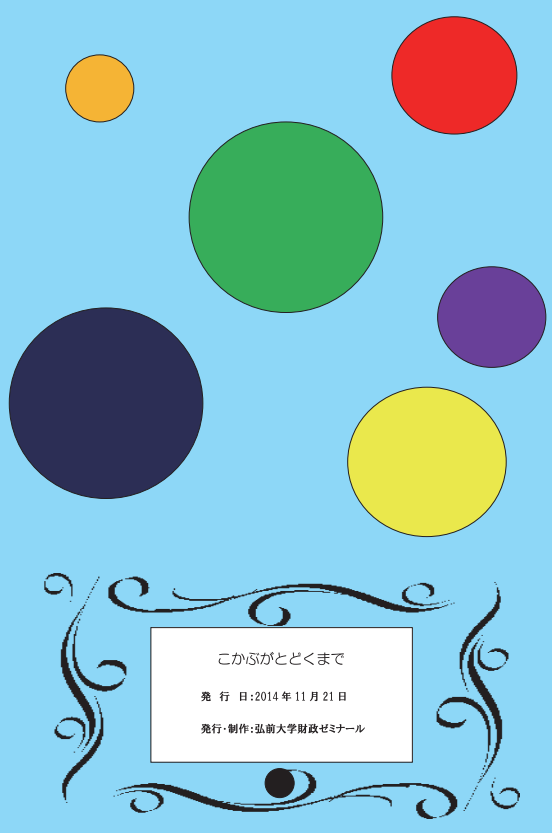
保護者の方へのメッセージ

私達がこのような活動をおこなっている背景には、「弘前市は
農業の盛んな地域だが、農業従事者の減少や高齢化などが
年々進行しており、改善すべき状況である」ということがあります。
そこで私たち大学生が少しでもこの問題改善への力になりたいと
感じ、農業の魅力を伝え、子どもたちの興味・関心が向上するこ
とを目指しています。



今回、題材として「こかぶ」を選定した理由は2つあります。1つ
めは、童話「おおきなかぶ」が、子どもたちになじみ深いということ
です。2つめは、子どもたち自身が肌で感じられるような「食育」
に繋げたいと考えたためです。実は、かぶはプランターでお手
軽に栽培でき、3週間ほどで収穫できる野菜です。

子どもたちの実体験を通した学びが「食育」として大切なことで
あり、また親子で行うことで、お子さんの意欲や関心をより高めら
れるといえるでしょう。是非ともこの冊子を活用して多くのご家庭
で「食育」を行っていただけたらうれしく思います。



こかぶがとどくまで
発行日: 2014年11月21日
発行・制作: 弘前大学財政ゼミナール

「人口減少と新しい街づくり
～次世代の空き家活用～」

弘前大学 飯島ゼミ

厚海史織

斉藤光

鈴木広一

高田真鈴

田倉聖子

西島宏幸

野宮俊太郎

福田紗紀

1. はじめに

皆さんは、自分の家の他に「自由に使える家」を持ってみたいと思っただろうか。

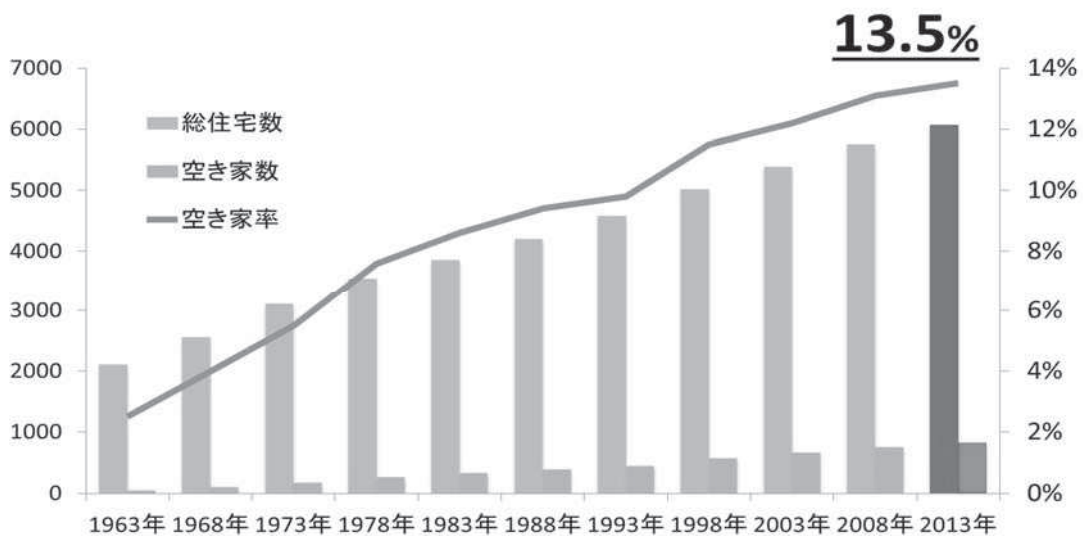
例えば、自分の家では出来ない音楽の演奏、親子で楽しむ料理教室など、共通の趣味を持つ人たちで集まるといった、自由に活動できるスペースのことである。このような場所が身近にあり、いつでも自由に利用出来る、そのような街があるならば、誰しもが住んでみたいと思うだろう。

私達は、この提案の実現によって、今よりもっと豊かな生活を送ることが可能であると信じている。そして、この理想を「空き家」を使うことで実現させようと考えている。

しかし、多くの人は空き家に対してどんなイメージを持つだろうか。空き家には、破損や倒壊、老朽化など、負のイメージが強く印象付けられている。

確かに、「空き家」は社会問題にもなっている。図表1のグラフは、全国の空き家率の推移を示している。これによると、日本全国の空き家率は2013年に13.5%と過去最高となった。空き家が増える理由として、人口減少と少子高齢化の二つが主に関わっている。そのため、空き家は構造的に増加する傾向にあり、空き家率も上昇していくことは明白である。

図表1 空き家率の推移



出所:総務省 平成25年「住宅土地統計調査」より作成

また、空き家の多くが利用されず放置されていることも問題である。この状況が変わらない限り、空き家は治安・景観の悪化に留まらず、将来的には地域の荒廃に繋がるだろう。

このように、空き家の負のイメージは地域にも負の影響をもたらす。したがって、空き家が多い地域に住みたいと思う人はいないだろう。私達は、空き家が多い街を見ると非常に心が痛む。だからこそ、多くの空き家が放置されている現状を私達の手で変えた

い、という思いから調査研究を行った。以上より、私達は革新的な空き家対策を提言する。

2. 問題意識

ここからは、問題意識として、空き家とはどういったものか、また空き家の問題とは何かについて説明する。

一口に空き家と言っても、これを3つに分類することができる。売却・賃貸用住宅、別荘などの二次的住宅、その他の住宅である。空き家は管理されていないと著しく劣化し、そして、空き家の劣化状態はこれらの分類ごとに違う。売却・賃貸用住宅と二次的住宅は、管理が行われている。しかし、その他の住宅では、居住者が長期間不在であるため、適切な管理が行われておらず、放置されているのが現状である。また、その他の住宅のような空き家は、将来的に近隣に被害を及ぼす危険空き家になる可能性がある。

この空き家問題を解決するために以下のような研究を行った。先行研究として国内事例や海外事例を研究し、インタビュー調査では五所川原市を対象に新たな空き家対策を模索した。ここで五所川原市を選考した理由は、高齢者世帯が多く、その高齢者の多くが家を持っているため、今後空き家の増加が加速度的に進行する地域であると考えられるからである。図表2は、五所川原でのインタビュー調査の対象や質問について示している。今回の調査では、町内会や市役所など空き家対策に関連する方々、25件にお話を伺った。

図表 2 インタビュー調査概要

対象	質問内容	実施日
不動産会社(5社)	・空き家の問題意識 ・空き家の外部不経済について ・提案の問題点 等22項目	9月10,11,18日
町内会長(15人)	・空き家の問題意識 ・町内の空き家把握 ・空き家利用方法 等13項目	9月10,11日
市役所担当職員	・他の自治体の対策について ・町内会との協力について 等5項目	9月11日
地域金融機関(3行)	・過去の社会貢献の内容 ・タウンシェアハウスへの協力 ・提案の問題点 等12項目	9月18,19日

さて、あらゆる問題を解決するために必要なことは、物事の本質を見抜くことと既存のものを組み合わせ創造的な提案を生むことである。先行研究やインタビュー調査から、私達は空き家問題の2つの本質に気付くことができた。

1つ目は、「利用されないこと」。空き家とは「現在使われていない空間」であるので、これを利用することで今より生活を豊かにすることもできるだろう。それにもかかわらず、使わないという選択はその可能性を放棄していると言えるのではないだろうか。

2つ目は、「管理されないこと」。放置された空き家は、管理された空き家より劣化が速いということが不動産へのインタビューから得られた。また地域への悪影響も無視できるものではない。

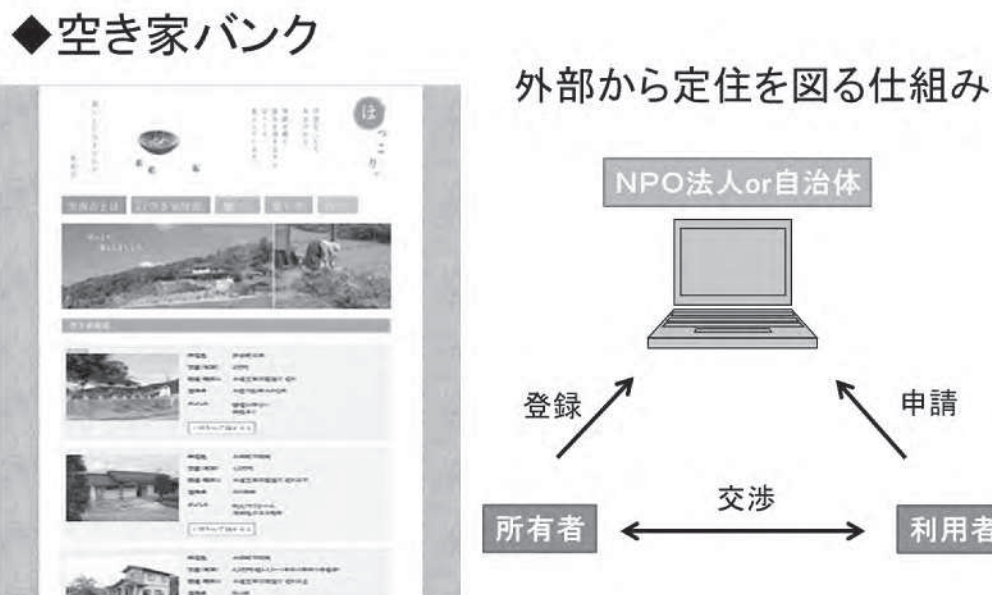
以上より、この2つを解決することで、空き家に対する根本的な解決策を講じることが可能であると考えた。

3. 先行事例

ここからは、先行研究の仕組みと課題を説明する。

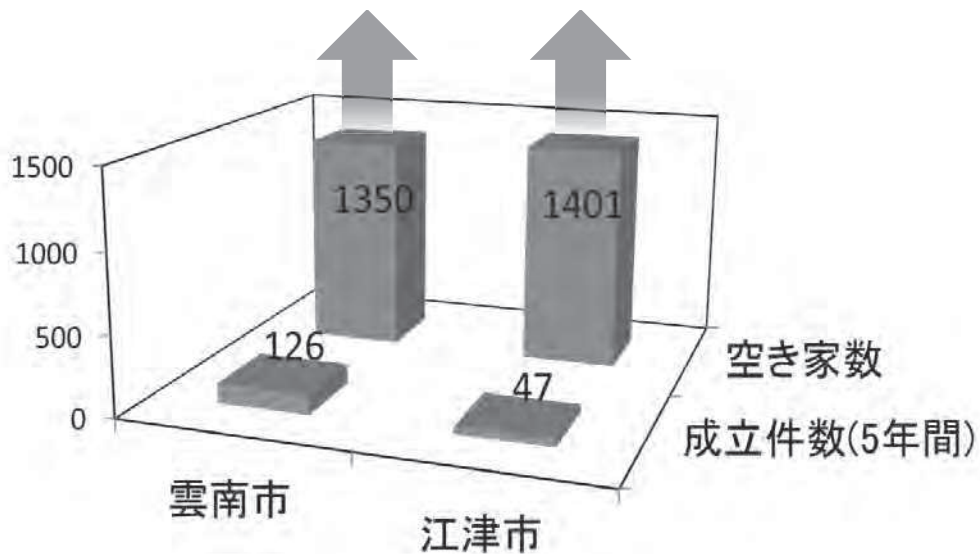
現在、日本で一番多く使われている仕組みが「空き家バンク」である。これは、NPO法人や自治体などを仲介機関として、空き家に関する情報をインターネット上などで公開し、全国から居住者を募集することで定住促進を図る仕組みだ（図表3）。

図表3 国内事例



しかし、この「空き家バンク」はそもそも空き家の登録件数や成約件数が少なく、実質的な活動が行えていない団体が多いことがわかった。そんな中でも、島根県雲南市と江津市は成約件数が多く成功している地域と言える。しかし図表4に示す通り、空き家を減少させるには圧倒的に不足している。

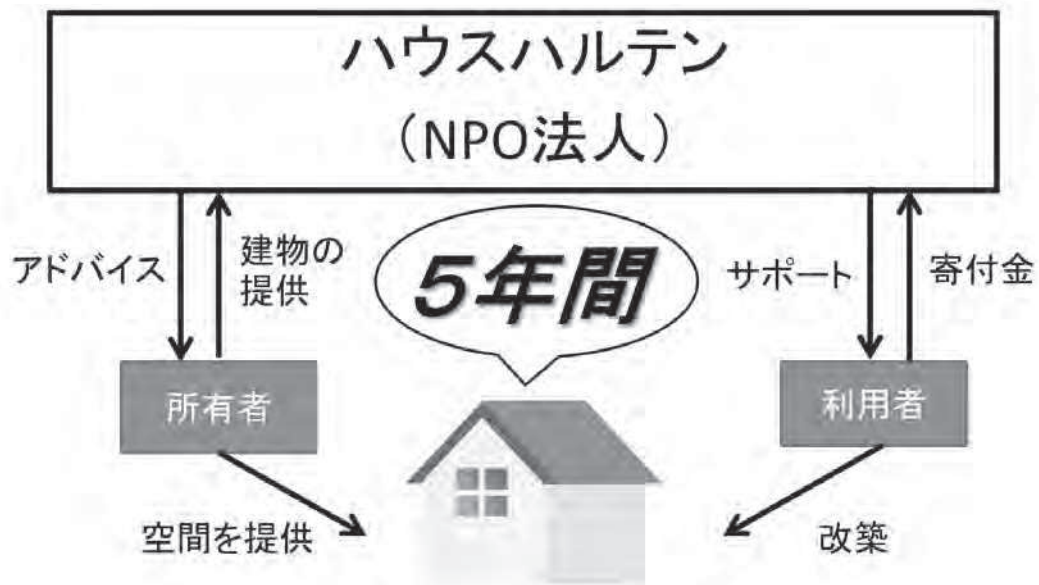
図表 4 空き家バンクの実績



出所：江津市・島根大学作野研究室「江津市の空き家実態調査(2006～2007)」
 総務省 「平成 20 年住宅土地統計調査」より作成

次に、海外では空き家の本質的な問題を捉えた仕組みが行われている。それはドイツのハウスハルテンである。この仕組みは、「本来、空間は使われることで初めて価値を持つ」という発想の基に「使用による保全」をコンセプトとしている。これは、NPO法人を仲介機関とし、所有者から建物を提供してもらい、それを利用者に5年の期限付きで貸し出す仕組みである（図表 5）。

図表 5 空き家バンクの実績



この 2 つの先行研究に共通する空き家対策は、「居住することが管理につながる」ことである。居住することがなぜ管理に繋がるのかというと、住宅の維持に必要な換気や通水、清掃などが、私たちの日常生活の中で行っていることだからである。

4. 提言

ここからは第三章として、私たちの提言を説明していく。

これからの空き家対策に必要なのは、目的を居住だけに限らず、より多くの人々に利用してもらうことである。では誰が空き家をどのように利用し管理すればよいか。

今までは「外部の人が居住することで管理が行われる」という発想のみであることが解った。私達はこれを「外向き」と定義する。この「外向き」の仕組みでは多くの空き家を利用できないことは先述の通りである。

そのため私たちは、「**地域の人々が利用することで管理につなげる**」という発想の転換をした。これを「内向き」と定義する。この「内向き」こそ、潜在的に高い利用頻度を望めるのである。地域の人々が使うのであれば、その回数や人数に上限などない。あくまでも空き家に「居住する」のではなく空き家を「利用する」のである。

私達はこの発想から、**空き家という空間を趣味や交流の場所として街全体で共有する**という意味を込めて、「**タウンシェアハウス**」という仕組みを提案する（図表 6）。

図表 6 タウンシェアハウスのイメージ図表



空き家という空間を趣味や交流の
場所として町全体で共有する

たとえば、「趣味の楽器を手軽に練習する場所がほしい」と思う人がいたとする。しかし、そんな場所は意外に少ないものだ。もし、空き家をニーズに合わせて趣味や交流の場として使うことができたなら、私達の生活はより豊かなものとなるだろう。

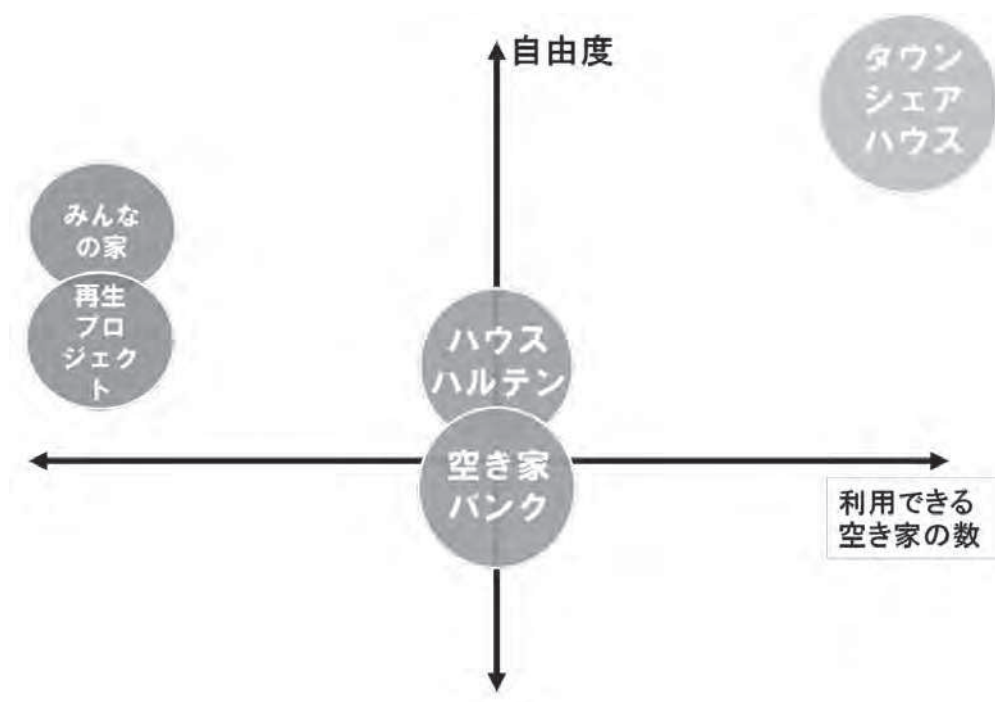
利用例は図表 7 のようになっている。たとえば、学生にとっては、サークルの活動場所や友達と集まる場所として利用できたら非常にありがたいものとなるだろう。

図表 7 タウンシェアハウスの利用例

<p>まちの居間 ～高齢者向け～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お茶を飲んだり、おしゃべりできるスペース ・ボードゲーム（囲碁・将棋・トランプ等） 	<p>まちの女子会 ～女性向け～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・料理教室 ・ガーデニング ・アロマ教室 ・保育教室
<p>まちの学び舎 ～子供向け～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・勉強スペース ・環境教育 ・書道教室 ・天体観測 	<p>まちの基地 ～若者向け～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ギターや楽器の練習場所 ・ガレージや倉庫（バイク、車、収集物）＝趣味の活動場所。

このタウンシェアハウスの考え方は部分的には既に行われている。広島県尾道市では「空き家再生プロジェクト」という、NPO法人による取組が行われている。これは、戦前の建築技法が詰めこまれた古民家を改修・再生し、再生完了後はお茶会や雛祭りなどの様々なイベントの場に活用するというものだ。また、五所川原市の松島町内会では「松島みんなの家」といって、町内にある一軒の空き家を地域交流の場として活用している。このように、地域の人による利用は既に行われているのである。それでは、ここでこれまでの空き家対策を比較していく（図表 8）。

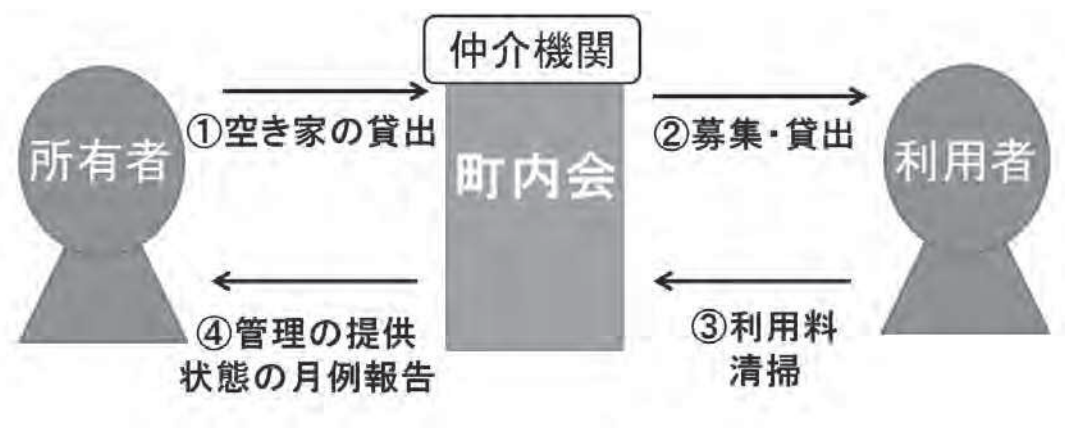
図表 8 空き家対策の比較



縦の軸が空き家の利用目的の自由度、横の軸が利用できる空き家の数である。松島みんなの家と尾道の空き家再生プロジェクトは利用できる自由度は高いが、利用できる空き家の数は少ない。次に、空き家バンクとハウスハルテンは利用できる空き家の数はあるが、自由度の幅は狭い。それは利用目的が居住しかないからである。このように既存の対策だけでは空き家問題を解決することはできない。空き家対策に必要なのは、利用の幅が広くて誰でも使えることである。それが、私たちの提案するタウンシェアハウスである。

そこで、この仕組みを継続させていくために、所有者と利用者の窓口になる仕組みが必要だと考えた（図表 9）。その重要な役割を担うのが町内会である。町内会の役割は 4 つある。まずは、町内会が所有者と交渉し、空き家を借り受ける。次に、町内会は利用者を募集し、利用者にその空き家を貸し出す。そして、利用者から利用料を受け取り、利用後には簡単な清掃をしてもらう。最後に、所有者には空き家を貸し出した代わりに、空き家管理の提供と状態の月例報告を行う。

図表 9 タウンシェアハウスの仕組み



町内会と、利用者が行う管理内容は図表 10 のとおりである。

図表 10 管理内容



利用者により管理
通気換気
通水雨漏り確認
清掃
町内会により管理
草刈り、庭木の手入れ
付近の確認
有事後の巡回、報告

空き家の破損・劣化を防ぐ

この重要な役割を町内会にしたのには、2つの理由がある。

1つ目は、町内にある空き家の把握が容易であるということ。五所川原市でのインタビューから、ほとんどの町内会長が空き家を把握していることがわかった。また、先行研究から行政やNPO法人が空き家調査をするよりもコストが低いことも分かった。

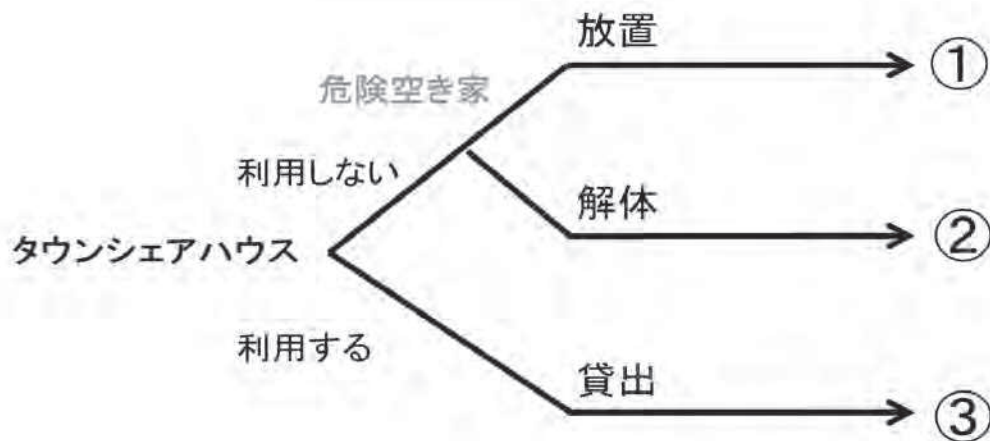
2つ目は、所有者と利用者の身近にある組織であるということ。町内会は利用者の立場でもあり、所有者との情報を共有しやすくまた信頼できる組織と言えるからである。

ところで、このタウンシェアハウスという仕組みが成り立つためには、多くの空き家が必要となる。そこで所有者のメリットを明確にすることで空き家提供の促進を図らなければならない。

しかし、空き家の多くは放置されているのが現状である。放置されている主な原因は住宅用地の特例措置にある。これは、住宅用地に掛かる固定資産税や都市計画税といった地方税を軽減する仕組みである。しかし、空き家を解体し更地にした場合、税金の軽減がなくなる。そのため、所有者の多くは空き家を放置するのである。

現在この住宅用地の特例措置の見直しが検討されている。これは、老朽化により倒壊の危険性のある空き家について特例の適用を中止し、所有者の税負担を大幅に増加させる仕組みである。これにより所有者に空き家を管理するインセンティブが与えられる。この見直しが適用されたときの所有者の行動と税負担については図表 11、12 の通りである。

図表 11 特例が見直しされた場合の所有者の行動パターン



図表 12 特例が見直しされた場合の所有者の税負担の試算

Ex.)青森県平均 8万円/1坪

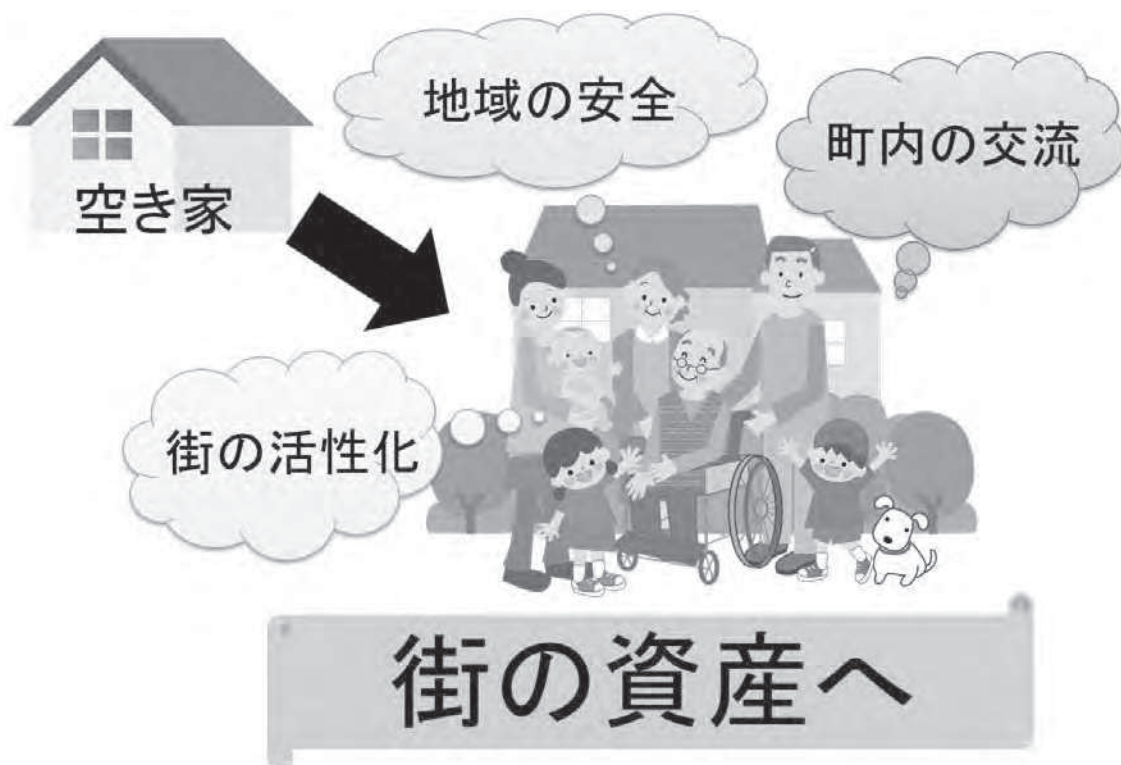
<p>①放置 固定資産税(特例なし)</p>	➡	<p><u>¥ 16.8万円</u></p>
<p>②解体 固定資産税(特例なし) 解体費用</p>	➡	<p><u>¥ 12.6万円</u></p>
<p>③貸出 固定資産税(特例あり)</p>	➡	<p><u>¥ 10.6万円</u></p>

所有者がタウンシェアハウスの仕組みを利用したときのメリットを説明していく。この仕組みにより、町内会と利用者による管理が行われ、空き家の破損や劣化を防ぐことになる。また、空き家の老朽化を抑制することで危険空き家への移行期間が延びる。そのため、特例の軽減措置が適用され続け、将来的な税負担の増加リスクを大幅に軽減することになる。

最後に、私たちの提案するタウンシェアハウスの効果をまとめる。

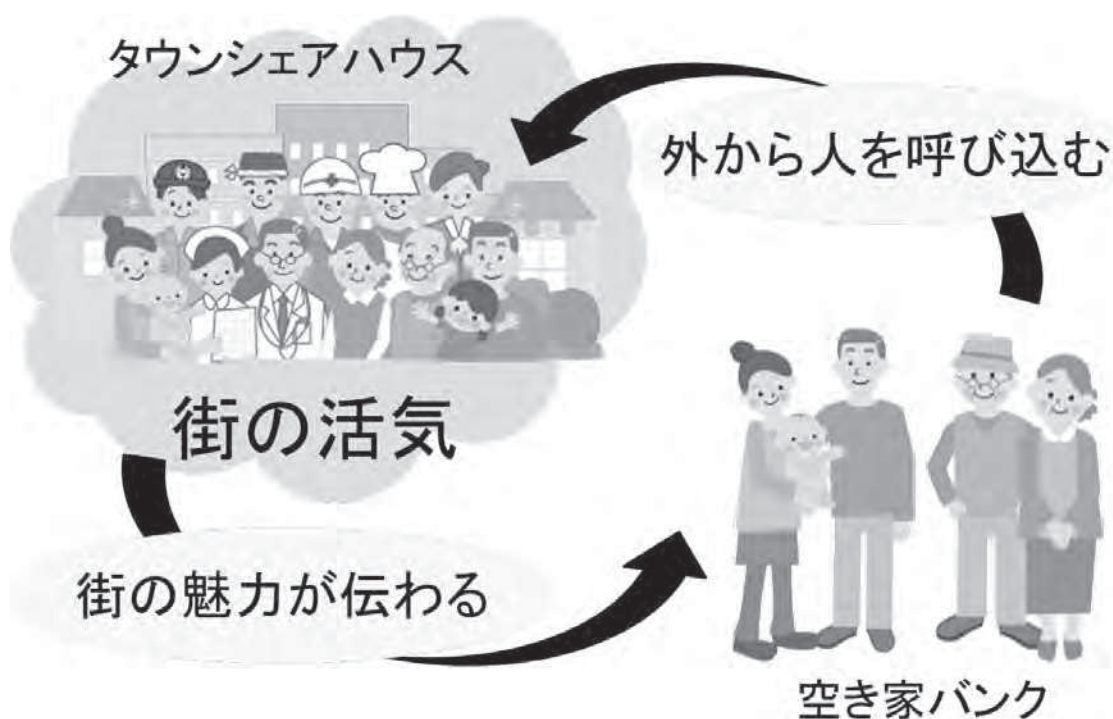
まず、空き家の利用・管理により、空き家の破損・劣化を防ぐことができるため、空き家の危険性がなくなり、地域の安全につながる。次に、地域の人々が空き家を利用することで交流が盛んになり、空き家への関心も高まる。また空き家が地域の人々の交流の場となることで、街の活性化も期待できる。そして、これまで放置されていた空き家を利用することで、空き家は価値のないものから、地域の人々が共有する資産へ変わる。つまり、空き家を利用することは、一軒一軒の空き家の保全に留まらず、最終的には地域全体を保全することに繋がっていくのである(図表 13)。

図表 13 タウンシェアハウスの効果(1)



将来的には、多くの空き家が利用され、街の雰囲気はより活気づくため、街はより魅力のある街へと変わる。そして外の地域からの居住者も増加し、多くの人々が充実した生活を送れる豊かな街になるだろう（図表 14）。

図表 14 タウンシェアハウスの効果(2)



5. まとめ

空き家は今後も日本各地で増え続けていく。タウンシェアハウスの仕組みは、空き家の本質的な問題である「利用」と「管理」を同時に解決することができる。

空き家バンクだけでなく、次世代に向けた空き家活用には、新しい街づくりとしての内向き利用が必要不可欠である。

○調査研究に参加しての感想

本研究は、青森県西北地域県民局からの委託研究での調査を活用しています。

空き家問題の背景には日本の急激な少子高齢化と人口減少があります。特に高齢者の持家率が高く、将来では空き家の爆発的な増加が懸念されています。それゆえに、実現可能性が高く、将来を見通した仕組みを提案するという目標を持ってこの研究に取り組んできました。空き家問題は様々な要素が絡み合っていて、一筋縄では行かないテーマであり、飯島裕胤教授からの助言を頂きながら日々議論を積み重ねました。

インタビュー調査にあたって、快く引き受けてくださった五所川原市各町内会会長、不動産会社、地域金融機関の方々、五所川原市市役所総務部の鳴海秀平様に感謝の意を表したいと思います。そして、私達の研究に貴重なご意見を賜りました、ゲストパネリストの鹿内葵様、高橋哲史様に深く感謝申し上げます。

また、本研究は『これからの空き家対策と地域金融機関～「タウンシェアハウス」の可能性～』として、日本銀行主催の「第10回日銀グランプリ」で佳作に選ばれました。この成果は多くの方々の協力無くしては成し得ないものです。本当にありがとうございました。

○報告要旨

近年、日本では空き家率が13.5%となり深刻な問題となっている。特に破損や倒壊を招きやすい放置空き家の被害が拡大しつつある。人口減少と少子高齢化を抱える日本では今後より深刻化するだろう。空き家の利活用が大きな課題となっている。

この「空き家問題」に対して、私たちは「タウンシェアハウス」という仕組みを作ることを提案する。これは各地域の町内会を仲介機関として置くことで、空き家の所有者と利用者を繋ぐものである。この提案は、空き家を趣味や交流の場として地域の人々の資産にすることが目的だ。

空き家のなかには、なかなか転売や賃貸に結びつかないものも多い。よって所有者の手に余ることも少なくなく、解体する費用を考えると放置してしまう。しかしそのよう

な空き家に対する受け皿もほとんどないのが現状だ。もし、そのような空き家を地域の資産として再利用できるなら、空き家は価値のある物として生まれ変わる。私たちは先行研究とインタビュー調査によって「空き家は地域の資産となる」可能性を見出した。

インタビュー調査では、空き家の危険性を身近に感じているのは町内会であることが解った。空き家が放置されるなら管理したいという意欲的な意見も伺えた。また、町内の人々と交流する場を増やしたいとも述べていた。

先行事例では、利用に繋がる空き家が圧倒的に少ない点に問題があることが解った。

その原因は対象を地域外の人に絞り、目的を居住利用に限っていたからだ。つまり移住者を呼んで空き家の減少を図ろうとしたのである。しかし、移住者数より空き家数をはるかに多いため効果は薄かった。

以上を踏まえ、私達は地域の幅広い世代の人々がいつでも自由に利用できるように、町内会を仲介機関として空き家をコミュニティスペースとして開放する方策を考えた。

仲介機関を町内会とする理由は、町内に住む人々の情報の共有をしており、それを空き家に応用できるからだ。町内会は地域の空き家の把握が容易であり、所有者と利用者の身近にある団体だから信頼しやすい。町内会の役割は所有者と交渉して空き家を借り受け、利用者を募集してその空き家を利用者に貸し出すことだ。所有者には貸し出した代わりに空き家の管理の提供と状態報告を行う。

この仕組みは既存の対策と併用することで最大限の効果が期待できると私たちは考える。

タウンシェアハウスの仕組みは地域内の人々の交流を盛んにすることで地域の安全や街の活性化を促すものである。そこに外の人達に対するパイプがあれば、その魅力は外に伝わり、移住者を増やすことに繋がる。

このように、空き家は価値のなかったものから地域の人々が共有する資産へ変わることができる。一軒一軒の空き家を保全することが、最終的に町全体を保全することに繋がるのだ。

2014 12/3 水
15:00~18:00

土手町コミュニティパーク
多目的ホール (弘前市土手町31番地)

参加無料

定員100名 ※事前申込み不要
対象:一般市民の方・行政関係者・学生・教員

地域を動かしてゆくとはいか?

学生発、地域未来創生プロジェクト活動成果発表会



Guest panelists (ゲストパネリスト)

高橋 哲史

株式会社百姓堂本舗弘前シードル工房kimori 代表

平成14年、Uターン就農。「農家の庭先でシードルを」を合言葉に弘前シードル工房kimoriを設立。農家製地シードルの製造や、りんご畑でのイベントなどを行っている。



Guest panelists (ゲストパネリスト)

鹿内 葵

特定非営利活動法人スポネット弘前 理事長
日本体育協会公認クラブマネージャー

「スポーツで創る元気なまち」を合言葉にスポネット弘前を設立。弘前城リレーマラソンをはじめとし、様々なスポーツイベントや定期的なスポーツ教室などを開催している。今年度からは南富田町体育センターの指定管理も受託するなど、スポーツを通じたまちづくりに奮闘中。



詳しいタイムスケジュールは裏面へ▶▶▶

主催: 弘前大学地域未来創生センター

お問い合わせ | 弘前大学地域未来創生センター 〒036-8560 青森県弘前市文京町1 TEL 0172-39-3198(平日10:15~15:00)
E-mail irrc@cc.hirosaki-u.ac.jp URL http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/irrc/

弘前大学地域未来創生センター
地域未来創生センター
Regional Future Innovation Center



学生発、地域未来創生プロジェクト活動成果発表会 **地域を動かしてゆくには？**

Objective 〈目的〉

「地域を動かしてゆこう」を理念に、弘前大学人文学部経済系4ゼミナールは、青森県の主要課題を研究してきました。

今年のテーマは、「観光」「農業」「健康」「空き家」。大学生の視点による研究発表を実施します。また、地域で活躍する若手リーダーをお招きして、大学生とゲストによる率直な意見交換を行います。



Time Schedule 〈タイムスケジュール〉

15:00～15:10 開会・プロモーション

15:10～16:50 研究発表と意見交換

※1ゼミあたり、発表15分・ゲストからの質疑応答10分

1. つくろう・味わおう・ふれあおう あおもり・通リズム …… [弘前大学 李ゼミ]
2. 青森健康革命 ～未来へつなぐ運動プロジェクト～ …… [弘前大学 小谷田ゼミ]
3. 農の魅力、子どもに発信! …… [弘前大学 金目ゼミ]
4. 人口減少と新しい街づくり ～次世代の空き家活用～ …… [弘前大学 飯島ゼミ]

17:00～17:50 講評と意見交換 ※ゲストによる自己紹介と発表への講評 各15分・学生からの質疑応答とアピール20分

共通テーマ「**地域を動かしてゆくには？**」

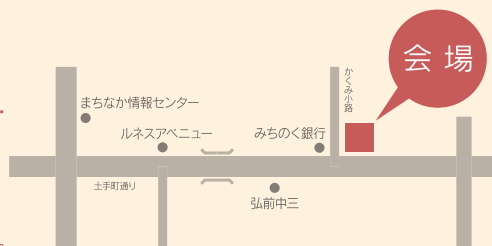
17:50～18:00 閉会

Access Map 〈アクセスマップ〉

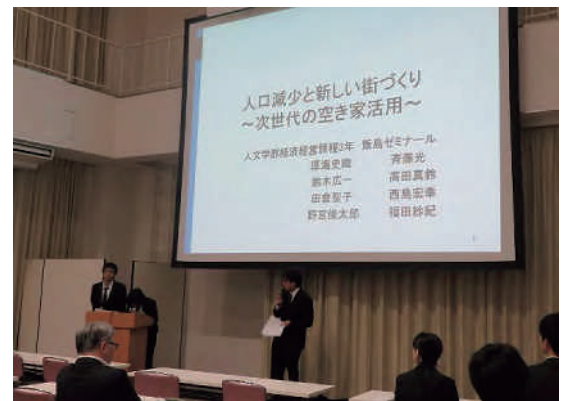
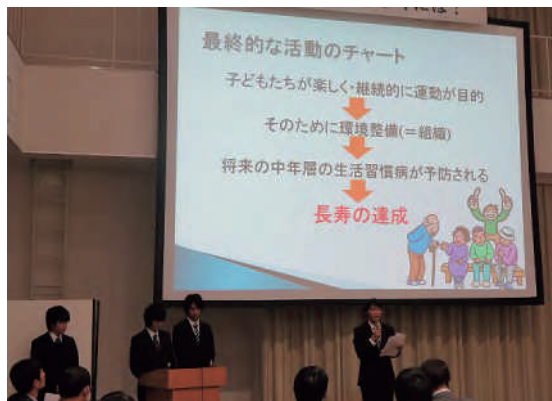
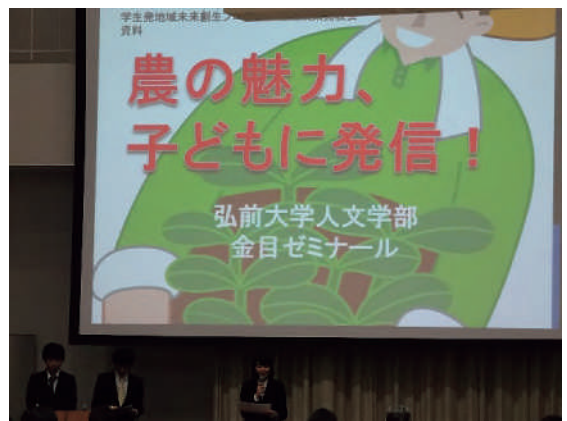
土手町コミュニティパーク 多目的ホール まで

- JR弘前駅より徒歩 約30分
- 土手町循環バス 下土手町下車 約1分

※会場には駐車場がございませんので、最寄の有料駐車場をご利用ください。



ご案内 「人口減少を克服する持続可能な地域づくり」をテーマに**地域未来創生塾@中央公民館**を開催!
 (日時) 11月26日㈫・12月10日㈫・12月24日㈫・1月14日㈫・1月28日㈫ 18:30～20:00 (場所) 弘前文化センター 第3会議室



平成 26 年度 学生発 地域未来創生プロジェクト
地域を動かしてゆくには？
成果報告書

2015 年 2 月

編 集 ・ 発 行

弘前大学地域未来創生センター
〒036-8560 青森県弘前市文京町1
電 話 0 1 7 2 - 3 9 - 3 1 9 8
Email irrc@hirosaki-u.ac.jp
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/irrc/>